

## (12)特許協力条約に基づいて公開された国際出願

(19) 世界知的所有権機関  
国際事務局(43) 国際公開日  
2003年8月7日 (07.08.2003)

PCT

(10) 国際公開番号  
WO 03/064366 A1(51) 国際特許分類<sup>7</sup>:

C07C 51/43, 59/06

(74) 代理人: 渡邊 潤三 (WATANABE,Junzo); 〒107-0052 東京都 港区 赤坂 1丁目 3番 5号 赤坂アビタシオンビル 3階 Tokyo (JP).

(21) 国際出願番号:

PCT/JP03/00858

(22) 国際出願日:

2003年1月29日 (29.01.2003)

(25) 国際出願の言語:

日本語

(81) 指定国 (国内): AE, AG, AL, AM, AT, AU, AZ, BA, BB, BG, BR, BY, BZ, CA, CH, CN, CO, CR, CU, CZ, DE, DK, DM, DZ, EC, EE, ES, FI, GB, GD, GE, GH, GM, HR, HU, ID, IL, IN, IS, JP, KE, KG, KP, KR, KZ, LC, LK, LR, LS, LT, LU, LV, MA, MD, MG, MK, MN, MW, MX, MZ, NO, NZ, OM, PH, PL, PT, RO, RU, SC, SD, SE, SG, SK, SL, TJ, TM, TN, TR, TT, TZ, UA, UG, US, UZ, VC, VN, YU, ZA, ZM, ZW.

(30) 優先権データ:

特願2002-20037 2002年1月29日 (29.01.2002) JP

(84) 指定国 (広域): ARIPO 特許 (GH, GM, KE, LS, MW, MZ, SD, SL, SZ, TZ, UG, ZM, ZW), ヨーラシア特許 (AM, AZ, BY, KG, KZ, MD, RU, TJ, TM), ヨーロッパ特許 (AT, BE, BG, CH, CY, CZ, DE, DK, EE, ES, FI, FR, GB, GR, HU, IE, IT, LU, MC, NL, PT, SE, SI, SK, TR), OAPI 特許 (BF, BJ, CF, CG, CI, CM, GA, GN, GQ, GW, ML, MR, NE, SN, TD, TG).

(72) 発明者; および

(75) 発明者/出願人 (米国についてのみ): 黒田 義人 (KURODA,Yoshito) [JP/JP]; 〒710-0847 岡山県 倉敷市 東富井1005-1 旭化成大高アパート3-208 Okayama (JP). 渡辺 春美 (WATANABE,Harumi) [JP/JP]; 〒712-8046 岡山県 倉敷市 福田町古新田1013-11 Okayama (JP).

添付公開書類:

— 国際調査報告書

2文字コード及び他の略語については、定期発行される各PCTガゼットの巻頭に掲載されている「コードと略語のガイドスノート」を参照。

(54) Title: PROCESS FOR PRODUCTION OF HIGH-PURITY CRYSTALS OF GLYCOLIC ACID

(54) 発明の名称: 高純度のグリコール酸結晶の製造方法

(57) Abstract: A process for production of high-purity crystals of glycolic acid, characterized by comprising the step (1) of forming an aqueous solution (A) of glycolic acid satisfying the following requirements (a), (b) and (c): (a) the water content is 5 to 20 % by mass, (b) the mass ratio of glycolic acid in terms of monomer [(the mass of monomeric glycolic acid contained in the solution (A) + the mass of glycolic acid monomer constituting the glycolic acid condensates contained in the solution (A))/the mass of the solution (A)] is 0.60 to 1.00, and (c) the monomeric glycolic acid content is 20 to 57 % by mass, the step (2) of precipitating crystals of glycolic acid from the solution (A), and the step (3) of separating the crystals from the solution (A).

[統葉有]

WO 03/064366 A1



---

(57) 要約:

(1) 次の特徴 (a)、(b) 及び (c) を有するグリコール酸水溶液 (A) を提供する工程: (a) 水分含有率が 5 ~ 20 質量 %、(b) 換算单量体グリコール酸質量比 [ (水溶液 (A) 中の单量体グリコール酸の質量 + 水溶液 (A) 中のグリコール酸縮合物の成分单量体グリコール酸の質量) / 水溶液 (A) の質量] が 0.60 ~ 1.00、及び (c) 单量体グリコール酸含有率が 20 ~ 57 質量 %、(2) 該水溶液 (A) からグリコール酸結晶を析出させる工程、及び (3) 析出したグリコール酸結晶を該水溶液 (A) から分離する工程を包含することを特徴とする、高純度のグリコール酸結晶を製造する方法が開示される。

## 明 細 書

## 高純度のグリコール酸結晶の製造方法

## 技術分野

本発明は、グリコール酸水溶液から高純度のグリコール酸結晶を製造する方法に関する。さらに詳しくは、本発明は、グリコール酸水溶液から高純度のグリコール酸結晶を製造する方法であって、水分含有率、換算単量体グリコール酸質量比〔(該水溶液中の単量体グリコール酸の質量 + 該水溶液中のグリコール酸縮合物の成分単量体グリコール酸の質量) / 該水溶液の質量] 及び単量体グリコール酸含有率が特定の範囲にあるグリコール酸水溶液を提供し、該水溶液からグリコール酸結晶を析出させ、析出したグリコール酸結晶を該水溶液から分離することを特徴とする方法に関する。本発明の方法により、高分子量のグリコール酸重合体を製造するためには必要な高純度のグリコール酸結晶を、簡便に且つ高収率で工業的規模で製造することが可能になる。

## 従来技術

グリコール酸は、従来より、化粧品、染毛剤、シャンプー、洗浄剤(家庭用洗浄剤、工業用洗浄剤など)、金属処理剤、皮なめし剤等などの重要な成分として用いられてきたが、近

年、化成品合成原料、各種樹脂製造用原料等としても広く用いられるようになつた。

上記の原料として用いるグリコール酸は、高純度のグリコール酸であることが求められている。このことについて、特に高い純度が要求される各種樹脂製造用原料用途を例に挙げて説明する。

一般に、グリコール酸を主要構成単位として含有するポリエスチル樹脂において、汎用樹脂用途向けに必要な機械強度を安定して発揮するためには、該樹脂の重量平均分子量は15万以上であることが望まれている（例えば、日本国特開平11-130847号公報（WO 9919378に対応））。このようなポリエスチル樹脂を、グリコール酸を主体とする原料から重縮合により製造する場合には、次の点に注意する必要がある。グリコール酸は、1分子内にカルボキシル基とアルコール性水酸基とをそれぞれ1個有する自己縮合性化合物である。グリコール酸の重縮合反応を行う際に、原料中に、たとえば、アルコール性水酸基を有しないカルボン酸類またはカルボキシル基を有しないアルコール類が不純物として含まれている場合、これらがグリコール酸及び／又はグリコール酸の重縮合物と反応を起こしてしまい、ポリエスチル樹脂を高分子量化することができなくなる。また、原料中に塩類等の不純物が含まれている場合には、得られる樹脂の機械特性を著しく低下させる。したがって、高分子量のポリエスチ

ル樹脂を、グリコール酸を主体とする原料として重縮合により製造する場合には、グリコール酸は高純度であることが要求される。通常、原料のグリコール酸は、99.9質量%以上の純度を有することが必要である。

グリコール酸の工業的製法の例として、

(a) 酸触媒存在下、ホルムアルデヒドと一酸化炭素及び水から製造する方法、

(b) クロロ酢酸をケン化する方法

等を挙げることができる。しかし、上記の方法ではグリコール酸は水溶液の形で得られるが、上記のいずれの場合にも、カルボン酸類やアルコール類が多量に副生したり、樹脂の機械特性を著しく低下させるほどの量の塩類等の不純物が副生したりする。したがって、高分子量樹脂製造用原料として用いることのできる高純度のグリコール酸を得るためにには、上記グリコール酸水溶液からグリコール酸を精製する工程が必要となる。

精製のための一般的な方法として蒸留法が挙げられる。グリコール酸の精製を蒸留で行う方法は、蒸留により蒸留物を得、得られた蒸留物を冷却固化することによって結晶の形で高純度のものを得ようとする方法である。しかし、上記グリコール酸水溶液に蒸留法を適用しても、高純度のグリコール酸結晶を得ることは困難である。理由は次の通りである。グリコール酸は揮発性が低い。さらに、グリコール酸は蒸留条

件下において重縮合反応を起こして蒸発しがたい縮合物を生成してしまう。したがって、高純度のグリコール酸結晶を得ることは困難である。

このため、上記の蒸留法以外の方法で、グリコール酸水溶液から高純度のグリコール酸結晶を製造する方法が提案されている。

例えば、日本国特開平8-268955号公報（E P 7 3 3 6 1 6 及び B R 9 6 0 1 0 6 3 に対応）は、グリコール酸水溶液から特定条件下で水を除去してグリコール酸を含む溶融物を形成し、形成した溶融物と結晶化剤とを混合し、次いで冷却することによりグリコール酸結晶を製造するという方法を提案している。しかし、この方法によって高純度のグリコール酸結晶を得ようとする場合には、予め電気透析や溶媒抽出等の方法により、グリコール酸水溶液を極めて高度に精製しておくことが必要である。したがって、工程が煩雑化、多段化し、簡便な方法とは到底言えないものである。

また、グリコール酸水溶液からグリコール酸結晶を製造する方法として、日本国特表平6-501268号公報（W O 9 2 0 5 1 3 8 及び E P 5 5 2 2 5 5 に対応）では、出発物質として、単量体グリコール酸約62.4質量%、グリコール酸2量体約8.8質量%、ジグリコール酸約2.2質量%、メトキシ酢酸約2.2質量%及びギ酸約0.24質量%を含有するグリコール酸水溶液を用い、この水溶液を-25~1

0 ℃の温度に冷却し、冷却液に結晶化を誘発するのに十分な量の高純度の結晶グリコール酸を種結晶として加えて、グリコール酸結晶を採取する方法が提案されている。この公報には、操作条件によっては、高純度のグリコール酸結晶が得られることが記載されている。しかし、高純度の結晶を高収率で得ようとする場合には、晶析操作に多大な時間が必要になってしまい経済的に不利になるという問題があった。

また、この公報には、収率を向上させるために、晶析後に得られた母液を濃縮し、再度晶析操作を行う方法等も記載されている。しかし、再度晶析操作を行った場合、回収される結晶の純度は極めて低くなってしまう。

なお、工業的に実施することは難しいが、高純度のグリコール酸結晶の製造方法として以下のような方法も知られている。粗グリコール酸結晶を得て、これをアセトン等の有機溶剤に溶解させて溶液を得、この溶液を静置条件にて-10 ℃に冷却することにより、高純度のグリコール酸結晶が得られる。また、日本国特開平5-92102号公報には、粗グリコール酸をアセトン等の有機溶剤に溶解して溶液を得、得られた溶液を高圧ガスと混合することにより高純度のグリコール酸結晶が得られることが記載されている。

しかし、これらの方法を工業的規模で実施しようとすれば、有害である溶剤を大量に使用することになる上、全量を蒸留によって留去又は回収する必要が生じるので、環境上及び経

済上、到底、工業的方法として用いることはできないものである。

このように、従来の技術では、グリコール酸水溶液から高純度のグリコール酸結晶を簡便に且つ高収率で工業的規模で製造することはできなかった。

### 発明の概要

このような状況の下で、本発明者らは、グリコール酸水溶液から高純度のグリコール酸結晶を簡便に且つ高収率で工業的規模で製造する方法を開発するために鋭意検討した。その結果、グリコール酸水溶液として、水分含有率、換算単量体グリコール酸質量比〔（該水溶液中の単量体グリコール酸の質量 + 該水溶液中のグリコール酸縮合物の成分単量体グリコール酸の質量）／該水溶液の質量〕及び単量体グリコール酸含有率が特定の範囲にあるグリコール酸水溶液を用いてグリコール酸の晶析を行うことにより、グリコール酸以外のカルボン酸類、アルコール類、塩類等の不純物をほとんど含まない、高純度のグリコール酸結晶を簡便に且つ高収率で工業的規模で製造することができることを知見した。この知見に基づいて、本発明は完成された。

したがって、本発明の1つの目的は、グリコール酸水溶液から極めて高純度のグリコール酸結晶を簡便に且つ高収率で工業的規模で製造する方法を提供することにある。

本発明の上記及びその他の諸目的、諸特徴ならびに諸利益は、以下の詳細な説明及び請求の範囲から明らかになる。

### 発明の詳細な説明

本発明によれば、グリコール酸水溶液から高純度のグリコール酸結晶を製造する方法であって、次の工程：

(1) 単量体グリコール酸及びグリコール酸縮合物を含有し且つ次の特性 (a)、(b) 及び (c) を有するグリコール酸水溶液 (A) を提供する工程：

(a) 水分含有率は 5 ~ 20 質量 % である、

(b) 該単量体グリコール酸の質量と、成分単量体グリコール酸の質量に換算した該グリコール酸縮合物の質量との合計の、該グリコール酸水溶液 (A) の質量に対する比として定義される換算単量体グリコール酸質量比は 0.60 ~ 1.00 である、及び

(c) 単量体グリコール酸含有率は 20 ~ 57 質量 % である、

(2) 該グリコール酸水溶液 (A) からグリコール酸結晶を析出させる工程、及び

(3) 析出したグリコール酸結晶を該グリコール酸水溶液 (A) から分離する工程

を包含することを特徴とする方法が提供される。

次に、本発明の理解を容易にするために、まず本発明の基

本的特徴及び好ましい態様を列挙する。

1. グリコール酸水溶液から高純度のグリコール酸結晶を製造する方法であって、次の工程：

(1) 単量体グリコール酸及びグリコール酸縮合物を含有し且つ次の特性 (a)、(b) 及び (c) を有するグリコール酸水溶液 (A) を提供する工程：

(a) 水分含有率は 5 ~ 20 質量 % である、

(b) 該単量体グリコール酸の質量と、成分単量体グリコール酸の質量に換算した該グリコール酸縮合物の質量との合計の、該グリコール酸水溶液 (A) の質量に対する比として定義される換算単量体グリコール酸質量比は 0.60 ~ 1.00 である、及び

(c) 単量体グリコール酸含有率は 20 ~ 57 質量 % である、

(2) 該グリコール酸水溶液 (A) からグリコール酸結晶を析出させる工程、及び

(3) 析出したグリコール酸結晶を該グリコール酸水溶液 (A) から分離する工程

を包含することを特徴とする方法。

2. 工程 (2) における該グリコール酸水溶液 (A) からのグリコール酸結晶の析出を、-30 ~ 50 °C の範囲の温度で

行うことを特徴とする、前項 1 に記載の方法。

3. 工程 (2) における該グリコール酸水溶液 (A) からのグリコール酸結晶の析出を、種結晶としてのグリコール酸結晶の存在下で行うことを特徴とする、前項 1 または 2 に記載の方法。

4. 工程 (3) の後にさらに次の工程：

(4) 分離したグリコール酸結晶をグリコール酸水溶液 (B) で洗浄する工程

を包含することを特徴とする、前項 1 ~ 3 のいずれかに記載の方法。

5. 該グリコール酸水溶液 (B) が単量体グリコール酸、及び場合によってはグリコール酸縮合物を含有し、且つ次の式 (I) 及び (II) を満足することを特徴とする、前項 4 に記載の方法。

$$0.0055 \times T + 0.3$$

$$\leq W \leq 0.0072 \times T + 0.8 \quad (I)$$

$$-5 \leq T \leq 70 \quad (II)$$

(式中、

W は、該単量体グリコール酸の質量と、成分単量体グリコール酸の質量に換算した該グリコール酸縮合物の質量との合

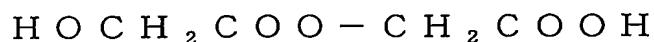
計の、該グリコール酸水溶液（B）の質量に対する比として定義される換算单量体グリコール酸質量比を表し、

Tは該グリコール酸水溶液（B）の温度（℃）を表す。）

以下、本発明を詳細に説明する。

まず、本発明において用いる種々の用語について説明する。

「グリコール酸結晶」とは、单量体グリコール酸が結晶化したもの、または、单量体グリコール酸及びグリコール酸縮合物の両者が結晶化したものを意味する。ここで「单量体グリコール酸」とは、单量体としてのグリコール酸、即ち $\text{HOCH}_2\text{COOH}$ を意味し、「グリコール酸縮合物」とは、複数の单量体グリコール酸分子同士がエステル結合を介して自己縮合したもの、または、单量体グリコール酸と他の化合物とがエステル結合を介して縮合したものを意味する。たとえば、次の式



で表されるグリコール酸2量体、及び次の式

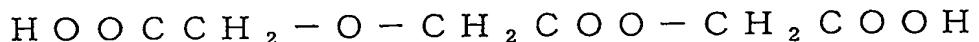


で表される、グリコール酸と乳酸とのエステルは、グリコール酸縮合物である。これに対し、たとえば、次の式



で表されるジグリコール酸のように、複数の单量体グリコール酸分子同士がエーテル結合を介して縮合したものは、本発

明でいうグリコール酸縮合物には含まれない。なお、次の式



で表される、ジグリコール酸を含むが、それとグリコール酸とのエステルであるものは、グリコール酸縮合物である。

「グリコール酸水溶液」とは、単量体グリコール酸の水溶液、または、単量体グリコール酸及びグリコール酸縮合物の両者の水溶液を意味する。

グリコール酸水溶液の「換算単量体グリコール酸質量比」とは、該グリコール酸水溶液中の、単量体グリコール酸の質量と、成分単量体グリコール酸の質量に換算した該グリコール酸縮合物の質量との合計の、該グリコール酸水溶液の質量に対する比として定義される。グリコール酸縮合物の成分単量体グリコール酸とは、該グリコール酸縮合物を塩基性水溶液（たとえば水酸化ナトリウム水溶液）で加水分解した後、酸性条件とすることによって得られる単量体グリコール酸を意味する。上記の定義から分かるように、グリコール酸自己縮合物の場合、成分単量体グリコール酸の質量に換算したグリコール酸自己縮合物の質量は、グリコール酸自己縮合物そのものの質量より大きくなる。従って、グリコール酸水溶液中の大部分がグリコール酸自己縮合物として存在している場合には、換算単量体グリコール酸質量比は1を越えることがある。

グリコール酸水溶液の換算単量体グリコール酸質量比は、

次のように求める。該グリコール酸水溶液（グリコール酸として単量体のみを含む場合と、単量体及び縮合物を含む場合とがある）を塩基性水溶液（たとえば水酸化ナトリウム水溶液）を用いて加水分解に付し、次いで酸性条件とすることでサンプル水溶液を得る。サンプル水溶液中の単量体グリコール酸の濃度を高速液体クロマトグラフィーによって測定し、得られた濃度からサンプル水溶液中の単量体グリコール酸の質量を算出する。換算単量体グリコール酸質量比は、該グリコール酸水溶液の質量に対する、サンプル水溶液中の単量体グリコール酸の質量の比として表される。

本発明で用いるグリコール酸水溶液は、不純物を含んでいてもよい。不純物の例としては、グリコール酸の合成過程で副生する有機化合物（例えば、上記のジグリコール酸や乳酸など）、及びグリコール酸の合成に用いる試薬などに由来する無機化合物（例えば、塩化ナトリウム）やグリコール酸の合成に用いた装置から溶け出した金属（例えば、ニッケル、クロム、及びチタンなどのイオン）などの無機物が挙げられる（不純物の具体例に関しては後述する）。なお、該グリコール酸水溶液が、不純物として、上記のジグリコール酸や乳酸などの、グリコール酸と縮合可能な化合物を含む場合、そのような化合物は、該グリコール酸水溶液中で、グリコール酸と縮合して上記のグリコール酸縮合物を形成していても、そのような縮合物を形成せずに独立して存在していてもよい。

該グリコール酸水溶液の、上記のような不純物（上記の有機化合物及び／又は上記の無機物）の含有有率（質量%）は、以下の方法により測定することができる。不純物としての有機化合物の同定及び定量は、上記の高速液体クロマトグラフィーによる、グリコール酸水溶液を加水分解に付して得られた水溶液の分析結果より行なうことができる。この方法においては、本発明で用いるグリコール酸水溶液が、上記のようなジグリコール酸や乳酸などの不純物と、グリコール酸との縮合物を含む場合も、加水分解によりジグリコール酸や乳酸などの不純物はグリコール酸から分離されているので、高速液体クロマトグラフィーにより該不純物の同定及び定量を行うことができる。

不純物としての上記無機物の量は、該グリコール酸水溶液中に存在する金属陽イオン（ナトリウムイオンなど）及び無機物陰イオン（塩素イオンなど）の量を測定し、その総和として算出することにより求める。上記イオンの定量方法に限定はないが、例えば、ナトリウムイオンのような金属陽イオンの定量は、ICP発光分析法、原子吸光分析法及びイオンクロマトグラフィーなどによって行なうことができ、塩素イオンのような無機物陰イオンの定量はイオンクロマトグラフィーなどによって行なうことができる。

このようにして得られた不純物（上記の有機化合物、及び／又は無機物）の合計質量の、該グリコール酸水溶液の質量

に対する百分比を計算し、不純物含有率（質量%）を求める。

グリコール酸結晶中の不純物の含有率も上記と同様の方法で行なう。本発明においては、このようにして得られた不純物含有率の値を用いて、以下の式によりグリコール酸結晶の純度（質量%）を求める。

グリコール酸結晶の純度（質量%）

$$= 100 - (\text{グリコール酸結晶の不純物含有率})$$

以下、本発明の方法について説明する。本発明の方法は、グリコール酸水溶液から高純度のグリコール酸結晶を製造する方法であって、次の工程（1）～（3）を包含する：

（1）単量体グリコール酸及びグリコール酸縮合物を含有し且つ次の特性（a）、（b）及び（c）を有するグリコール酸水溶液（A）を提供する工程：

（a）水分含有率は5～20質量%である、

（b）該単量体グリコール酸の質量と、成分単量体グリコール酸の質量に換算した該グリコール酸縮合物の質量との合計の、該グリコール酸水溶液（A）の質量に対する比として定義される換算単量体グリコール酸質量比は0.60～1.00である、及び

（c）単量体グリコール酸含有率は20～57質量%である、

(2) 該グリコール酸水溶液 (A) からグリコール酸結晶を析出させる工程、及び

(3) 析出したグリコール酸結晶を該グリコール酸水溶液 (A) から分離する工程。

まず、工程 (1) について説明する。工程 (1) においては、グリコール酸水溶液 (A) を提供する。グリコール酸水溶液 (A) は、単量体グリコール酸及びグリコール酸縮合物を含有し、且つ、上記の特性 (a)、(b) 及び (c) を有するものである限り特に限定はなく、上述したように不純物を含んでいてもよい。

上記の特性 (a)、(b) 及び (c) について説明する。

まず、特性 (a) について説明する。グリコール酸水溶液 (A) の水分含有率は、5～20質量%であり、好ましくは7～19質量%、さらに好ましくは8～18質量%である。

水溶液の水分含有率が5質量%未満である場合には、得られるグリコール酸結晶の純度が低下するという問題だけでなく、グリコール酸水溶液、或いは、グリコール酸結晶を析出させた後に得られる、グリコール酸結晶を含むスラリーの粘度が高くなるため、取り扱い性が悪くなる、結晶を析出させた後の分離操作が困難となる、といった問題が生ずる。一方、水分含有率が20質量%を越える場合には、得られる結晶の純度が低下する。

グリコール酸水溶液 (A) の水分含有率の測定は、水分測

定装置を用いて行う。

特性（b）について説明する。上記のようにグリコール酸水溶液（A）は、単量体グリコール酸及び該グリコール酸縮合物を含有するが、該単量体グリコール酸の質量と、成分単量体グリコール酸の質量に換算した該グリコール酸縮合物の質量との合計の、該グリコール酸水溶液（A）の質量に対する比として定義される換算単量体グリコール酸質量比は、0.60～1.00でなければならない。

グリコール酸水溶液（A）の換算単量体グリコール酸質量比は、好ましくは0.70～0.95、さらに好ましくは0.75～0.93である。

換算単量体グリコール酸質量比が0.60未満である場合には、得られる結晶の収率が著しく低下する。一方、換算単量体グリコール酸質量比が1.00を越える場合には、得られるグリコール酸結晶の純度が低下するという問題だけでなく、グリコール酸水溶液、或いは、グリコール酸結晶を析出させた後に得られる、グリコール酸結晶を含むスラリーの粘度が高くなるため、取り扱い性が悪くなる、結晶を析出させた後の分離操作が困難となる、といった問題が生ずる。

特性（c）について説明する。グリコール酸水溶液（A）の単量体グリコール酸含有率は20～57質量%であり、好ましくは35～56質量%、さらに好ましくは40～55質量%である。

単量体グリコール酸含有率が20質量%未満である場合には、得られる結晶の収率が著しく低下する。一方、単量体グリコール酸含有率が57質量%を越える場合には、得られるグリコール酸結晶の純度が低下する。

グリコール酸水溶液(A)の単量体グリコール酸含有率は、次のように求める。グリコール酸水溶液(A)を脱水ピリジンで希釈し、更にシリル化してサンプル溶液を得る。サンプル溶液中の単量体グリコール酸のシリル化物の濃度をガスクロマトグラフィーによって測定し、得られた濃度から該水溶液(A)中の単量体グリコール酸の質量を算出する。単量体グリコール酸含有率は、該水溶液(A)の質量に対する、サンプル溶液中の単量体グリコール酸の質量%として表される。

上記のように、グリコール酸水溶液(A)は1種又は2種以上の不純物を含んでいてもよい。しかし、グリコール酸水溶液(A)の不純物の量は、上記の不純物含有率で表して、好ましくは28質量%以下、さらに好ましくは23質量%以下、特に好ましくは20質量%以下である。

不純物の例として、ギ酸、酢酸、プロパン酸、ブタン酸、ペンタン酸、ヘキサン酸、メトキシ酢酸等のカルボン酸類、シュウ酸、マロン酸、グルタル酸、コハク酸、アジピン酸、ピメリシン酸、スペリン酸、アゼライン酸、セバシン酸、ウンデカン二酸、ドデカン二酸、フマル酸、マレイイン酸、ジグリコール酸、1,4-シクロヘキサンジカルボン酸、1,3,

4-ブタントリカルボン酸、1,3,6-ヘキサントリカルボン酸、フタル酸、イソフタル酸、テレフタル酸、プロパントリカルボン酸、トリメリット酸、ピロメリット酸、エチレンジアミン四酢酸等のポリカルボン酸類、メタノール、エタノール、1-プロパノール、2-プロパノール、1-ブタノール、2-ブタノール、2-メチル-1-プロパノール、2-メチル-2-プロパノール、1-ペントノール、1-ヘキサノール等のアルコール類、エチレングリコール、1,3-プロパンジオール、1,2-プロパンジオール、1,4-ブタンジオール、2,3-ブタンジオール、1,5-ペンタンジオール、1,6-ヘキサンジオール、1,7-ヘプタンジオール、1,8-オクタンジオール、1,9-ノナンジオール、1,10-デカンジオール、1,12-ドデカンジオール、1,4-シクロヘキサンジオール、1,2-シクロヘキサンジオール、ネオペンチルグリコール、ビスフェノールA、ジエチレングリコール、トリエチレングリコール、テトラエチレングリコール、ホルムアルデヒドの低分子量重合物、グリセリン、ブタン-1,2,3-トリオール等の等のポリオール類、澱粉、グルコース、セルロース、ヘミセルロース、キシラン、キシロース、キシリトール、ペンタエリスリトール、キチン、キトサン、デキストリン、デキストラン、カルボキシメチルセルロース、アミロペクチン、グリコーゲン等の多糖類、乳酸、2-ヒド

ロキシペンタノイックアシッド、2-ヒドロキシヘキサノイックアシッド、2-ヒドロキシヘプタノイックアシッド、2-ヒドロキシオクタノイックアシッド、2-ヒドロキシ-2-メチルプロパノイックアシッド、2-ヒドロキシ-2-メチルブタノイックアシッド、2-ヒドロキシ-2-エチルブタノイックアシッド、2-ヒドロキシ-2-メチルペンタノイックアシッド、2-ヒドロキシ-2-エチルペンタノイックアシッド、2-ヒドロキシ-2-プロピルペンタノイックアシッド、2-ヒドロキシ-2-ブチルペンタノイックアシッド、3-ヒドロキシプロパノイックアシッド、3-ヒドロキシペンタノイックアシッド、3-ヒドロキシヘキサノイックアシッド、3-ヒドロキシヘプタノイックアシッド、3-ヒドロキシオクタノイックアシッド、3-ヒドロキシ-3-メチルブタノイックアシッド、3-ヒドロキシ-3-メチルペンタノイックアシッド、3-ヒドロキシ-3-エチルペンタノイックアシッド、4-ヒドロキシブタノイックアシッド、4-ヒドロキシペンタノイックアシッド、4-ヒドロキシヘキサノイックアシッド、4-ヒドロキシヘプタノイックアシッド、4-ヒドロキシオクタノイックアシッド、4-ヒドロキシ-4-メチルペンタノイックアシッド、5-ヒドロキシペンタノイックアシッド、ヒドロキシ安息香酸、グリセリン酸、ジグリセリン酸、酒石酸、リンゴ酸、クエン酸等のヒドロキカルボン酸

類、アンモニア、メチルアミン、エチルアミン、アニリン等のアミン類、ヒドラジン、メチルヒドラジン、モノメチレンジアミン、ジメチレンジアミン、トリメチレンジアミン、テトラメチレンジアミン、ペンタメチレンジアミン、ヘキサメチレンジアミン、ヘプタメチレンジアミン、オクタメチレンジアミン、ノナメチレンジアミン、デカメチレンジアミン、ウンデカメチレンジアミン、ドデカメチレンジアミン等の多価アミン類、グリシン、(+) -アラニン、 $\beta$ -アラニン、(-) -アスパラギン、(+) -アスパラギン酸、(-) -システイン、(+) -グルタミンサン、(+) -グルタミン、(-) -ヒドロキシリシン、(-) -ロイシン、(+) -イソロイシン、(+) -リシン、(-) -メチオニン、(-) -セリン、(-) -トレオニン、(+) -バリン、アミノ酪酸、アザセリン、アルギニン、エチオニン等のアミノ酸類、ホルムアルデヒド、アセトアルデヒド等のアルデヒド類、アセトン、メチルエチルケトン等のケトン類が挙げられる。

不純物の例として、更に、元素周期律表1族のリチウム、ナトリウム、カリウム、ルビジウム、セシウム、フランシウム、2族～12族に属する元素、13族のアルミニウム、ガリウム、インジウム、タリウム、14族の錫、鉛、ゲルマニウム、15族のアンチモン、16族のテルル等の元素、及び上記元素のイオンが挙げられる。

不純物の例として、更に、上記元素を一種含む化合物等が

挙げられる。このような化合物の例として、リチウム、ナトリウム、カリウム、バリウム、マグネシウム、カルシウム、クロム、亜鉛、鉛、ニッケル、マンガン、鉄、ニオブ、バナジウム、銅、チタン、アルミニウム、ランタン、セリウム、ストロンチウム、コバルト、ダングステン、ジルコニウム及びモリブデンからなる群より選ばれる金属のイオンと、上記のカルボン酸、ポリカルボン酸、ヒドロキシカルボン酸、又はグリコール酸等のカルボキシル基含有化合物のカルボン酸陰イオンとの塩が挙げられる。

不純物の例として、更に、元素周期律表1族のリチウム、ナトリウム、カリウム、ルビジウム、セシウム、フランシウム、2族～17族に属する元素などから選ばれる元素を2種以上含む化合物が挙げられる。このような化合物の例としては、リチウム、ナトリウム、カリウム、バリウム、マグネシウム、カルシウム、クロム、亜鉛、鉛、ニッケル、マンガン、鉄、ニオブ、バナジウム、銅、チタン、アルミニウム、ランタン、セリウム及びストロンチウムからなる群より選ばれる金属イオンと、フッ素イオン、塩素イオン、臭素イオン、沃素イオン、硫酸イオン、亜硫酸イオン、硝酸イオン、亜硝酸イオン、過塩素酸イオン、リン酸イオン、亜リン酸イオン及びホウ酸イオンからなる群より選ばれるイオンとの塩が挙げられる。

上記の不純物として挙げた化合物は、自己縮合物、又は2

種以上の化合物の縮合物の形で水溶液中に存在している場合もある。また、グリコール酸との縮合物の形で水溶液中に存在している場合もある。

上記の不純物は、グリコール酸水溶液（A）の製造において副生したり（例えば、上記のジグリコール酸や乳酸）、グリコール酸の合成に用いる試薬などに由来したり（例えば、塩化ナトリウム）、グリコール酸水溶液（A）の製造に用いた装置に由来したりする（例えば、ニッケル、クロム、及びチタンなどのイオン）。

グリコール酸水溶液（A）の製造方法について説明する。グリコール酸水溶液（A）の製造方法については特に限定はなく、公知の方法を用いることができる。たとえば、次の2工程を包含する方法を用いて製造することができる：

（1-i）公知の方法を用いてグリコール酸水溶液を製造する。

（1-ii）工程（1-i）で製造したグリコール酸水溶液の水分含有率、換算单量体グリコール酸質量比及び单量体グリコール酸含有率を調整することにより、グリコール酸水溶液（A）を製造する。

工程（1-i）について説明する。工程（1-i）の公知の製造方法の例として、化学合成法、及び酵素、酵母、微生物などを用いる発酵法を挙げることができる。これらの方法においては、通常、グリコール酸を製造する際にカルボキシ

ル基及び／又は水酸基を含有する化合物を副生する。

上記の化学合成法の例として、次の方法 (a) ~ (f) を挙げることができる：

(a) 酸触媒の存在下で、ホルムアルデヒド、一酸化炭素及び水から製造する方法（たとえば、日本国特公昭53-44454号公報、米国特許第2,037,654号、米国特許第2,152,852号、米国特許第2,153,064号を参照）

(b) クロロ酢酸をケン化する方法（たとえば、日本国特開昭62-77349号公報を参照）、

(c) 強アルカリの存在下で、グリオキサールのカニッツア口反応でグリコール酸塩を製造し、酸を加えてグリコール酸を遊離させる方法（たとえば、Homolka, Chem. Ber., Vol. 54, p. 1395 (1921)、Salomaa, Acta Chem. Scand., Vol. 10, p. 311 (1956) を参照）、

(d) エチレングリコールを原料として、一官能基のみを選択的に酸化する方法（たとえば、日本国特公昭60-10016号公報を参照）、

(e) グリコロニトリルを原料として、加水分解により製造する方法（たとえば、米国特許第4,054,601号を参照）、

(f) シュウ酸の還元により製造する方法（たとえば、P.

S e v c i k 、 C h e m i c k e Z v e s t i 、 V o l .  
2 7 ( 3 ) 、 p . 3 0 6 ( 1 9 7 3 ) を参照) 。

上記の方法 (a) ~ (f) においては、グリコール酸は水溶液の形で得られる。なお、方法 (d) 及び (e) は上記の発酵法でも可能である。方法 (d) 、方法 (e) を発酵法で行う場合の例として、それぞれ、日本国特開平10-174593号公報、日本国特開平9-28390号公報に記載の方法を挙げることができる。

いずれの方法によるグリコール酸水溶液も市販のものを用いることができるが、方法 (a) 及び (b) で製造されるグリコール酸水溶液が、入手が容易であるために好ましく用いられ、より好ましくは、方法 (a) で製造されたグリコール酸水溶液が用いられる。また、上記の方法で得られるグリコール酸水溶液は、単独で用いてもよいし、2種以上を組み合わせて用いてもよい。

なお、グリコール酸水溶液中に不溶性の不純物（ゴミ、埃など）がある場合には、除去しておくことが好ましい。不溶性の不純物は公知の方法で除去できる。公知の除去方法の例として、濾過、沈降分離、遠心分離及び浮上分離などの方法を挙げることができる。これらの除去方法は、単独で用いてもよいし、2種以上を組み合わせて用いてもよい。濾過方法の例として、定圧濾過、定速濾過、変圧变速濾過、非1次元濾過、清澄濾過、濾材濾過を挙げることができる。これらの

濾過方法は、単独で用いてもよいし、2種以上を組み合わせて用いてもよい。上記の濾過方法は、回分式、連続式のどちらで行ってもよい。

工程(1-ii)について説明する。工程(1-ii)においては、工程(1-i)で製造したグリコール酸水溶液の水分含有率、換算単量体グリコール酸質量比及び単量体グリコール酸含有率を調整することにより、グリコール酸水溶液(A)を製造する。上記特性の調整方法については特に限定はない。

たとえば、換算単量体グリコール酸質量比及び単量体グリコール酸含有率がそれぞれ上記特性(b)、(c)における上限より高い場合には、水で希釈し、必要に応じて常圧下、減圧下或いは加圧下で加熱処理することにより、グリコール酸水溶液(A)を得ることができる。加熱処理する際の温度は、通常55～250℃、好ましくは70～200℃、さらに好ましくは80～170℃である。また、加熱処理する際の圧力は、通常101kPa(常圧)～5,000kPa、好ましくは101kPa(常圧)～1,600kPa、さらに好ましくは101kPa(常圧)～790kPaである。加熱処理する時間は、加熱処理温度、加熱処理圧力、加熱処理するグリコール酸水溶液の組成、希釈するために添加する水の量、所望のグリコール酸水溶液(A)の水分含有率、換算単量体グリコール酸質量比及び単量体グリコール酸含有率

の値等によつても異なるが、加水分解速度を考慮して1秒～50時間の範囲から適宜設定される。

一方、換算単量体グリコール酸質量比及び単量体グリコール酸含有率がそれぞれ上記特性（b）、（c）における下限より低い場合には、常圧下、減圧下または加圧下で脱水濃縮することにより、グリコール酸水溶液（A）を得ることができる。上記の脱水濃縮の温度は、通常55～250℃、好ましくは70～200℃、更に好ましくは80～170℃である。また、脱水濃縮する際の圧力は、通常0.001～4,000kPa、好ましくは0.1～1,600kPa、さらに好ましくは0.5～790kPaである。脱水濃縮の時間は、脱水濃縮に用いる装置の形状、脱水濃縮の温度、脱水濃縮の圧力、加熱処理するグリコール酸水溶液の組成、所望のグリコール酸水溶液（A）の水分含有率、換算単量体グリコール酸質量比及び単量体グリコール酸含有率の値等にもよつて異なるが、水の抜き出し速度や縮合反応速度を考慮して、1秒～50時間の範囲から適宜決定される。

次に、本発明の方法の工程（2）について説明する。工程（2）においては、工程（1）で製造したグリコール酸水溶液（A）からグリコール酸結晶を析出させる。結晶を析出させる方法については特に限定はなく、公知の方法を用いることができる。たとえば、グリコール酸水溶液（A）を攪拌下または静置条件下で冷却することにより、グリコール酸結晶

を析出させることができる。また、結晶の析出は回分式で行ってもよいし、連続式で行ってもよく、これらの組み合わせであってもよい。

工程（2）において用いる晶析装置には限定はなく、公知の装置を用いることができる。公知の晶析装置の例として、「別冊化学工業32-5 化学装置設計・操作シリーズN○3、改訂 晶析」（日本国化学工業社、1988年）の75～122頁に記載の、回分式攪拌晶析装置、単缶式真空冷却晶析器、スウェンソンウォーカー晶析器、カランドリア型装置、リングエレメント型装置、Crystal-Oslo型晶析装置、D.T.B.型晶析装置、D.P.型晶析装置、二段製粒DP型晶析装置、タービュレンス型晶析装置、逆円錐型晶析装置、パルスコラム冷却晶析装置、空気吹き込み式晶析装置、回転ドラム型晶析装置、冷媒の気化熱を利用する晶析装置、濡れ壁蒸発晶析装置、多段式冷却晶析器、豎型多段晶析装置、圧力晶析装置等が挙げられる。更には、攪拌機を有しない豎型、横型若しくは斜め型の槽又は塔等が挙げられる。これらは、単独で用いてもよいし、2種以上組み合わせて用いてもよい。

これらの装置を使用するに際しては、必要に応じて、伝熱面を通しての加熱や、潜熱を利用する蒸発冷却式や、伝熱面を通しての冷却式等の冷却を行うことができる。

以下、上記の装置について説明する。

回分式攪拌晶析装置は、攪拌翼、温度調節用媒体等を通すコイル、又はジャケットを有するものであり、適当な温度条件下で攪拌することにより結晶を析出させる装置である。

単缶式真空冷却晶析器は、槽下部に攪拌翼を有し、減圧とすることにより蒸発潜熱で冷却し、結晶を析出させる装置である。

スウェンソンウォーカー晶析器は、外部に温度調節用媒体を通すジャケットを備えた樋型の槽の内部に螺旋型の攪拌器を備えた装置であり、伝熱面を通して溶液の温度を調節し、攪拌することにより結晶を析出させる装置である。

カランドリア型装置は、晶析装置本体内に攪拌器とカランドリア型熱交換器とを備えた晶析装置であり、供給された溶液を熱交換器で温度調節して結晶を析出させる装置である。

リングエレメント型装置は、晶析装置本体内に攪拌器とリングエレメント型熱交換器を備えた晶析装置であり、供給された溶液を熱交換器で温度調節して結晶を析出させる装置である。

Crysta1-Os10型晶析装置は、分級流動層型装置であり、蒸発部と結晶成長部とからなり、蒸発部で得られた溶液を下降管を通して結晶成長部に送り、結晶を析出させる装置である。

D. T. B. 型晶析装置は、装置本体内にドラフトチューブ及び攪拌翼を有するものであり、温度調節された溶液を装

置内に供給し、結晶を装置内で析出或いは成長させながら循環し、分級する装置である。

D. P. 型晶析装置は、D. T. B. 型晶析装置の改良型であり、ドラフトチューブの外側にも攪拌翼をつけ、低回転でも十分に系内の循環ができるような形式である。

二段整粒D. P. 型晶析装置は、上記D. P. 型晶析装置の改良型である。

タービュレンス型晶析装置は、上記D. T. B. 型晶析装置の改良型である。溶液が下部から導入され、一次循環流と混合されて上部へ上昇し、蒸発部に導かれた後、断熱冷却された溶液がチューブ間を循環しつつ結晶を析出或いは成長させる装置である。

逆円錐型晶析装置は、上記Crystal-Oslo型晶析装置の改良型である。装置内の空隙率の分布をなくし、装置内結晶の平均懸濁密度を大きくした装置である。

パルスコラム冷却晶析装置は、内部に冷却管が設けられた晶析装置であり、当該冷却管へのスケール付着を防ぐために、パルスを利用した装置である。

空気吹き込み式晶析装置は、槽内の循環を攪拌機或いは循環ポンプにより行うのではなく、空気を吹き込む形式で行う装置である。

回転ドラム型晶析装置は、槽と回転ドラムとを有する装置である。回転ドラムの内部に連続的に温度調節用媒体を送る

ことで、回転ドラムの伝熱面に付着した溶液を温度調節することにより結晶を析出させる装置である。

冷媒の気化熱を利用する晶析装置は、冷媒としてたとえば石油系炭化水素を溶液中に噴出させて、その気化熱を利用して溶液を冷却し、結晶を析出させる装置である。

濡れ壁蒸発晶析装置は、水平に置かれた管に、溶液を噴出すると共に、プロワーから温度調節された空気を吹き込むことによって、結晶を析出させる装置である。

多段式冷却晶析装置は、多段に仕切られた単位槽からなる装置であり、溶液或いはスラリーを各槽に順次連続的に移送しつつ晶析を行う装置である。

豎型多段晶析装置は、多段式冷却晶析装置の豎型構造の装置であり、多段に仕切られた単位槽からなる装置であって、溶液或いはスラリーを各槽に順次連続的に移送しつつ晶析を行う装置である。

圧力晶析装置は、溶液を断熱的に加圧することによって固液状態を変化させて結晶を析出させる装置である。

グリコール酸結晶を析出させる際の温度は、グリコール酸水溶液（A）の組成によっても異なるが、好ましくは-30～50℃、より好ましくは-15～40℃、最も好ましくは-10～30℃の範囲である。温度が-30℃未満である場合には、過冷却された溶液が凍結又は凝固により固化する場合がある。一方、温度が50℃を超える場合には、結晶化が

緩慢であり、且つ、得られる結晶収率が低下する傾向にある。

なお、結晶を析出させる際の温度は、結晶析出中、一定である必要はない。たとえば、-30～50℃の温度範囲で結晶析出を行う場合、-30～50℃の温度範囲で徐々に温度を上昇させてもよいし低下させてもよい。更に、上記の温度範囲内で昇温と冷却を繰り返し行なっても良い。

結晶を析出させる際の雰囲気には特に限定はない。例えば、空気下または空気流通下、不活性ガス雰囲気下または不活性ガス流通下で行なうことが可能である。不活性ガスの例として、窒素、ヘリウム、ネオン、アルゴン、クリプトン、キセノン、二酸化炭素、低級炭化水素が挙げられる。これらのガスは、単独で用いてもよいし、2種以上の混合ガスとして用いてもよい。

結晶を析出させる時間は、結晶の析出が十分に進行する程度の時間であれば特に限定はなく、通常1分～50時間、好みしくは2分～10時間、さらに好みしくは3分～3時間の範囲である。

グリコール酸水溶液(A)からのグリコール酸結晶の析出は、種結晶としてのグリコール酸結晶の存在下で行なうことが好みしい。これにより、グリコール酸の結晶化を誘発させることができる。

種結晶としてのグリコール酸結晶の純度は、高ければ高い程よく、上記の純度で表して、通常99質量%以上、好み

くは99.5質量%以上、より好ましくは99.8質量%以上である。

種結晶としてのグリコール酸結晶の量は、結晶化を誘発する量であれば特に制限はないが、グリコール酸水溶液(A)1kg当たり、通常0.001~100g、好ましくは0.01~50g、さらに好ましくは0.1~20gである。

工程(2)において、グリコール酸結晶は水溶液中に析出し、グリコール酸結晶が水溶液中に分散したスラリーが得られる。

次に工程(3)について説明する。工程(3)においては、析出したグリコール酸結晶をグリコール酸水溶液(A)から分離する、即ち、上記スラリーを固液分離する。固液分離は、連続式又は回分式、或いはこれらの組み合わせで行うことが可能である。

固液分離法には特に限定がなく、公知の方法を用いることができる。公知の方法の例として、減圧(真空)濾過、加圧濾過、遠心濾過、沈降分離等が挙げられ、更に、通気脱水や圧搾等を組み合わせて行うことが可能である。これらの方は、単独、又は組み合わせて行ってもよい。

工程(3)において分離されたグリコール酸結晶が水分を含んでいる場合には、乾燥し、水分が十分に除去された、高純度のグリコール酸結晶を得ることができる。なお、グリコール酸結晶が水分を含んでいる場合であっても、高分子量樹

脂製造用原料として用いることができる。

本発明において、分離されたグリコール酸結晶を乾燥してもよい。乾燥方法には特に限定はないが、通常、グリコール酸の融点までの温度範囲において、常圧下、減圧下、加圧下またはガス流通下で行う。これらの方法は、組み合わせて行うことができる。グリコール酸結晶を乾燥する際の雰囲気には特に限定はなく、例えば、空気下や、窒素、ヘリウム、ネオン、アルゴン、クリプトン、キセノン、二酸化炭素、低級炭化水素等の不活性ガス雰囲気下で行うことが可能である。これらのガスは、単独で用いてもよいし、2種以上の混合ガスとして用いてもよい。

上記の本発明の方法により、高純度のグリコール酸結晶が得られる。しかし、工程(3)の後、且つ乾燥の前に、洗浄液を用いてグリコール酸結晶のケークから母液等の残留物を徹底除去しておくと、得られるグリコール酸結晶の純度をさらに高めることができるので、好ましい。なお、工程(3)における固液分離中のグリコール酸結晶のケークを、洗浄液を用いて洗浄してもよい。さらに、工程(3)に次いで乾燥を行った後に、洗浄液を用いて洗浄し、工程(3)に記載した固液分離法と同様の方法で固液分離した後、再度、上記の乾燥を行うこともできる。

洗浄液の例としては、0℃を越え5℃以下の冷水や、メタノール、エタノール、1-ブロパノール、2-ブロパノール、

1-ブタノール、2-ブタノール、2-メチル-1-プロパノール、2-メチル-2-プロパノール、1-ペンタノール等の炭素数1～5のアルコール類、アセトン、メチルエチルケトン、メチルイソブチルケトン等のケトン類、グリコール酸水溶液を挙げることができる。これらのうち、使用溶剤の無害性、及び洗浄後の液のリサイクル性、回収結晶収率の低下の抑制などの観点から、グリコール酸水溶液が好ましい。

以下、洗浄液としてグリコール酸水溶液を用いる場合、即ち、工程(3)の後にさらに次の工程：

(4) 分離したグリコール酸結晶をグリコール酸水溶液(B)で洗浄する工程  
を行う場合について説明する。

グリコール酸水溶液(B)としては、単量体グリコール酸、及び場合によってはグリコール酸縮合物を含有し、且つ次の式(I)及び(II)：

$$0.0055 \times T + 0.3$$

$$W \leq 0.0072 \times T + 0.8 \quad (I)$$

$$-5 \leq T \leq 70 \quad (II)$$

(式中、

Wは、該単量体グリコール酸の質量と、成分単量体グリコール酸の質量に換算した該グリコール酸縮合物の質量との合計の、該グリコール酸水溶液(B)の質量に対する比として定義される換算単量体グリコール酸質量比を表し、

Tは該グリコール酸水溶液（B）の温度（℃）を表す。）を満足するものであることが好ましい。

換算単量体グリコール酸質量比Wが $0.0055 \times T + 0.3$ 未満である場合には、得られるグリコール酸結晶の収率が低下する傾向がある。一方、換算単量体グリコール酸質量比Wが $0.0072 \times T + 0.8$ を越える場合には、貯蔵中、移送中に結晶が析出しやすくなる。

温度Tは、0～65℃の範囲にあることがより好ましく、25～60℃の範囲にあることがさらに好ましい。

温度Tが-5℃未満である場合には、洗浄効果が小さくなる。一方、温度Tが70℃を越える場合には、換算単量体グリコール酸質量比Wが著しく高くなり、洗浄のために使用するグリコール酸量が多大となってしまい、好ましくない。

なお、温度T及び換算単量体グリコール酸質量比Wは洗浄中一定である必要はなく、洗浄中の任意の時刻において上記式（I）及び（II）を満足していればよい。したがって、洗浄中に温度Tを徐々に上昇させてもよいし、低下させてもよい。更に、昇温と冷却を繰り返し行なってもよい。

また、グリコール酸水溶液（B）としては、不純物の量が少ないものを用いることが好ましい。具体的には、該水溶液中の単量体グリコール酸及び該水溶液中のグリコール酸縮合物の成分単量体グリコール酸の合計の該水溶液の水以外の成分に対する質量比の大きいものを用いることが好ましい。具

体的には、上記質量比は0.995以上が好ましく、0.998以上がより好ましく、0.999以上が特に好ましい。上記質量比は大きいほど好ましい。

グリコール酸水溶液（B）の量は、水溶液（B）を用いる温度において、グリコール酸水溶液（A）1kgに対し、通常0.0001～4リットル、好ましくは0.005～2.5リットル、さらに好ましくは0.01～1.5リットルである。ただし、上記の量は、グリコール酸水溶液（B）を複数回に分けて用いる場合には、用いたグリコール酸水溶液（B）の総量を意味する。

工程（4）において、洗浄の方法については特に限定はなく、公知の洗浄方法を用いることにより、残留物を除去することができる。公知の洗浄方法の例として、洗浄液をグリコール酸結晶のケーキへ透過させて、空隙、たとえば結晶間の空隙に残留する濾液を除去する置換洗浄法、洗浄液を用いてグリコール酸結晶のケーキをスラリー化し、再度固液分離するケーキ洗浄法が挙げられる。更に、発汗作用と洗浄作用とによって結晶を精製する方法〔例えば、「別冊化学工業32-5 化学装置設計・操作シリーズNo.3、改訂 晶析」（日本国化学工業社、1988年）の99～100頁に記載のK.C.P.連続精製装置を用いる方法〕等が挙げられる。これら の方法は、単独で用いてもよいし、組み合わせて用いてもよい。

なお、上記の除去方法は、グリコール酸水溶液（B）の代わりにグリコール酸水溶液以外の上記の洗浄液を用いる場合にも適用できる。

上記のように、洗浄は固液分離中のグリコール酸結晶のケークに対して行うこともできる。この場合、洗浄液としては上記のものを用いることができ、除去方法としては工程（4）の説明において述べた方法を用いることができる。

また、洗浄は、工程（3）に次いで乾燥を行った後に得られたグリコール酸結晶に対してても行うことができる。この場合にも、洗浄液としては上記のものを用いることができ、除去方法としては工程（4）の説明においてグリコール酸結晶のケークに対して述べた方法を用いることができる。

洗浄液を使用して残留物の除去を行う場合には、望むなら、除去操作を複数回行っても良い。その際、固液分離を組み合わせて行なうことが好ましい。

なお、上記の洗浄液としてグリコール酸水溶液を用いる場合には、洗浄後に固液分離によって回収された洗浄液の一部又は全部を、グリコール酸水溶液（A）を製造するための原料として、或いは、洗浄液としてリサイクルすると、グリコール酸の利用効率を向上させることができるのであるため、好ましい。

また、グリコール酸結晶を分離した母液の一部又は全部を、グリコール酸水溶液（A）を製造するための原料としてリサ

イクルすると、グリコール酸の利用効率を向上させることができ  
可能であるため、好ましい。

母液のリサイクル方法には特に限定はない。例えば、母液  
をそのまま用いてもよいし、濃縮して用いてもよい。さらに、  
母液の一部又は全部に対して、新たなグリコール酸水溶液を  
追加してリサイクルしてもよい。

例えば、母液がグリコール酸水溶液（A）の特性（a）、  
(b)、(c)を満たす場合には、母液をそのまま用いても  
よいし、特性（a）、(b)、(c)を満たすように維持し  
ながら、加熱処理或いは脱水濃縮を行った後に、用いること  
もできる。必要に応じて、加熱処理の前後或いは脱水濃縮の  
後で、水で希釈してもよい。一方、母液が本発明のグリコー  
ル酸水溶液（A）の特性（a）、(b)、(c)の少なくとも  
1つを満たさない場合、上記工程（1-i）の説明にお  
いて述べた方法を用いて特性（a）、(b)、(c)が満た  
されるように調整してから用いることができる。

更に、母液の一部又は全部に対して、新たなグリコール酸  
水溶液を追加してリサイクルしてもよい。この際、母液の一  
部又は全部に新たなグリコール酸水溶液を追加して得られた  
グリコール酸水溶液がグリコール酸水溶液（A）の特性  
(a)、(b)、(c)を満たす場合には、母液をそのまま  
用いてもよいし、特性（a）、(b)、(c)を満たすよう  
に維持しながら、加熱処理或いは脱水濃縮を行った後に、用

いることもできる。必要に応じて、加熱処理の前後或いは脱水濃縮の後で、水で希釈してもよい。一方、母液の一部又は全部に新たなグリコール酸水溶液を追加して得られたグリコール酸水溶液がグリコール酸水溶液（A）の特性（a）、（b）、（c）の少なくとも1つを満たさない場合、上記工程（1～i）の説明において述べた方法を用いて特性（a）、（b）、（c）が満たされるように調整してから用いることができる。

グリコール酸水溶液（A）の製造工程、上記工程（1）～（4）で用いる装置の材質には特に限定はないが、通常、ガラス、ステンレススチール、カーボンスチール、ニッケル、ハステロイ、チタン、クロム、ジルコニウム、タンタル、その他合金やセラミック等から選ばれる。望むならば、材質の表面はメッキ、ライニング、不動態処理等の処理がなされていてもよい。

本発明の方法によって得られる高純度のグリコール酸結晶は、化粧品、染毛剤、シャンプー、洗浄剤（家庭用洗浄剤、工業用洗浄剤など）、金属処理剤、皮なめし剤等の成分として用いられるだけでなく、化成品合成原料、樹脂製造用原料（特に高分子量樹脂製造用原料）等としても用いられる。

たとえば、上記高純度グリコール酸結晶を用いて、グリコリドを合成することができる。合成方法については特に限定はなく、日本国特開2000-119269号公報、日本国

特開2002-114775号公報などに記載された方法を適用することができる。

また、上記高純度グリコール酸結晶を用いて、重量平均分子量が15万以上の、グリコール酸ホモポリマー樹脂やグリコール酸共重合体樹脂を製造することができる。このような高分子量樹脂を製造する方法については特に限定はなく、公知の方法を用いることができる。たとえば、上記高純度グリコール酸結晶と乳酸とを用いて重量平均分子量が15万以上のグリコール酸-乳酸共重合体を製造する方法として、日本国特開2002-293905号公報に記載された方法を挙げることができる。

なお、もちろん、上記高純度グリコール酸結晶を、重量平均分子量が15万未満の、グリコール酸ホモポリマー樹脂やグリコール酸共重合体樹脂を製造するための原料として用いることもできる。その方法については特に限定はなく、公知の方法を用いることができる。

本発明において、重合体の重量平均分子量は、ゲルパーエーションクロマトグラフィー（G P C）によって求める。

### 発明を実施するための最良の形態

以下に、本発明を製造例、実施例及び比較例により具体的に説明するが、これらは本発明の範囲を限定するものではない。

製造例、実施例及び比較例における測定及び算出は次の方法で行った。

#### (1) グリコール酸水溶液の水分含有率

カールフィッシュレー水分測定装置（日本国三菱化学（株）製 M O I S T U R E M E T E R（登録商標）CA-05）を用い、以下のように求める。

約 0.2 g のグリコール酸水溶液を秤量した後、測定試薬（日本国三菱化学（株）製アクアミクロン（登録商標）AKS）に投入し、グリコール酸水溶液の水分含有率を測定する。

#### (2) グリコール酸水溶液の換算単量体グリコール酸質量比及び不純物含有率

50 ml のメスフラスコに、約 5 g のグリコール酸水溶液（以下、「原液」と称する）を秤量採取し、20 ml の 8 N - NaOH 水溶液を加えて 10 時間保持することにより、水溶液中のグリコール酸縮合物の加水分解を行なう。その後、濃塩酸（日本国和光純薬試薬 35～37% 塩酸）12.5 ml を添加して酸性とし、さらに蒸留水で 50 ml に希釀する

ことにより、サンプル溶液を得る。このサンプル溶液を、高速液体クロマトグラフィーにより、下記の測定条件にて分析する。

＜高速液体クロマトグラフィー測定条件＞

カラム：日本国昭和電工（株）製 R S p a k （登録商）  
KC-811を2本直列で接続したものからなる

カラム温度：40°C

溶離液：0.75質量%の磷酸水溶液

溶離液流量：1m1／分

検出器：UVディテクター（検出波長210nm）

UVディテクター（波長210nm）にて検出された、単量体グリコール酸及び不純物としての有機化合物（たとえば、ジグリコール酸）のピークエリアカウント数を測定する。

別途作成したグリコール酸の検量線を用いて、上記のグリコール酸のピークエリアカウント数から、サンプル溶液中の単量体グリコール酸の質量を算出する。原液の換算単量体グリコール酸質量比は、原液に対する、サンプル溶液中の単量体グリコール酸の質量比として表される。

また、別途作成した不純物としての有機化合物（たとえば、ジグリコール酸）の検量線を用いて、上記の不純物としての

有機化合物（たとえば、ジグリコール酸）のピークエリアカウント数から、サンプル溶液中の不純物としての有機化合物（たとえば、ジグリコール酸）の質量を算出する。不純物含有率は、原液に対する、サンプル溶液中の不純物の質量%として表される。不純物としての有機化合物が複数種類ある場合には、不純物の総量は各不純物についての不純物含有率の総和として表される。

なお、実施例1～8、及び比較例1～6で用いたグリコール酸水溶液は無機物を実質的に含有しないので、無機物の量の測定は行わなかったが、実施例9で用いたグリコール酸水溶液は無機不純物として塩化ナトリウムを含有しているので、塩化ナトリウムの量を、下記の方法で測定して、塩化ナトリウムの量と上記の有機化合物の量との総和に基づいて不純物含有率を求めた。

### （3）グリコール酸水溶液中のナトリウムイオン含有率

200mlのメスフラスコに、約5gのグリコール酸水溶液（以下、「原液」と称する）を秤量採取し、蒸留水を加えて200mlに希釈し、サンプル水溶液を得る。このサンプル水溶液を、イオンクロマトグラフィーにより、下記の測定条件にて分析する。

## &lt;イオンクロマトグラフィー測定条件&gt;

装置：日本国東ソー（株）製 8020シリーズ

カラム：日本国東ソー（株）製 TSKgel I C - C

at ion

カラム温度：40°C

溶離液：2 mMol 硝酸水溶液

溶離液流量：0.5 mL/分

検出器：日本国東ソー（株）製 CM-8020 電導度  
計

電導度計にて検出されたナトリウムイオンのピークのエリ  
アカウント数を測定する。

別途作成したナトリウムイオンの検量線を用いて、上記の  
ナトリウムイオンのピークエリアのカウント数から、サンプ  
ル水溶液中のナトリウムイオンの質量を算出する。原液のナ  
トリウムイオン含有率は、原液に対する、サンプル水溶液中  
のナトリウムイオンの質量%として表される。

## (4) グリコール酸水溶液中の塩素イオン含有率

200 mL のメスフラスコに、約 5 g のグリコール酸水溶  
液（以下、「原液」と称する）を秤量採取し、蒸留水を加え  
て 200 mL に希釀し、サンプル水溶液を得る。このサンプ  
ル水溶液を、イオンクロマトグラフィーにより、下記の測定

条件にて分析する。

＜イオンクロマトグラフィー測定条件＞

装置：日本国東ソー（株）製 8020シリーズ

カラム：日本国東ソー（株）製 TSKgel Super  
IC-Anion-PWXL PEEK

カラム温度：40℃

溶離液：日本国東ソー（株）製 TSKeluent I  
C-Anion-A

溶離液流量：0.8ml／分

検出器：日本国東ソー（株）製 CM-8020 電導度  
計

電導度計にて検出された塩素イオンのピークのエリアカウント数を測定する。

別途作成した塩素イオンの検量線を用いて、上記の塩素イオンのピークエリアのカウント数から、サンプル水溶液中の塩素イオンの質量を算出する。原液の塩素イオン含有率は、原液に対する、サンプル水溶液中の塩素イオンの質量%として表される。

（5）グリコール酸水溶液中の塩化ナトリウム含有率

グリコール酸水溶液中の塩化ナトリウム含有率は次の式に

よって求める。

グリコール酸水溶液中の塩化ナトリウム含有率（質量%）

= グリコール酸水溶液中のナトリウムイオン含有率

+ グリコール酸水溶液中の塩素イオンの含有率

（6）グリコール酸水溶液の単量体グリコール酸含有率

50 ml のメスフラスコに、約 0.5 g のグリコール酸水溶液（以下、「原液」と称する）を秤量採取し、更に、内部標準として n-ドデカンを 0.1 g 秤量添加後、脱水ピリジンで 50 ml に希釈する。希釈溶液を 1 ml の N, O-ビストリメチルシリルアセトアミドに 0.3 ml 添加した後、室温にて 1 時間放置することにより、サンプル溶液を得る。このサンプル溶液を、ガスクロマトグラフィーにより、下記の測定条件にて分析する。

<ガスクロマトグラフィー測定条件>

カラム：米国 J & W Scientific (株) 製商

品名 DB-1、長さ 30 m、内径 0.25 mm、  
液膜 1  $\mu$ m

キャリアーガス：ヘリウム

検出器：水素炎イオン化検出器

インジェクション温度：250 °C

検出器温度：300℃

昇温条件：50℃から100℃まで10℃／minで昇温  
した後10分保持し、次いで、250℃まで10℃／minで昇温し、15分間保持する。

上記のガスクロマトグラフィー分析によって、内部標準として用いたn-ドデカンと单量体グリコール酸のシリル化物とのピークエリア比を得る。

別途、上記ピークエリア比と、上記n-ドデカンと上記シリル化物との濃度比との関係を表す検量線を作成する。この検量線を用いて、上記のピークエリア比から、サンプル溶液中の单量体グリコール酸のシリル化物の濃度を求め、これを单量体グリコール酸の質量に換算する。原液の单量体グリコール酸含有率は、原液に対する、サンプル溶液中の单量体グリコール酸の質量%として表される。

#### (7) グリコール酸結晶の不純物含有率及び純度

50mlのメスフラスコに、乾燥したグリコール酸結晶4gを秤量採取し、室温で20mlの8N-NaOH水溶液10mlにて5時間加水分解する。濃塩酸（日本国和光純薬試薬35～37%塩酸）12.5mlを添加して酸性とし、蒸留水で50mlに希釀することにより、サンプル溶液を得る。このサンプル溶液を、高速液体クロマトグラフィーにより、

下記の測定条件にて分析する。

＜高速液体クロマトグラフィー測定条件＞

カラム：日本国昭和電工（株）製 R S p a k （登録商標）KC-811を2本直列で接続したものからなる

カラム温度：40°C

溶離液：0.75質量%の磷酸水溶液

溶離液流量：1mL/分

検出器：UVディテクター（検出波長210nm）

UVディテクター（波長210nm）にて検出された、不純物としての有機化合物のピークエリアカウント数を測定する。

別途作成した不純物としての有機化合物の検量線を用いて、上記の有機化合物のピークエリアカウント数から、サンプル溶液中の不純物としての有機化合物の質量を算出する。不純物含有率は、グリコール酸結晶に対する、サンプル溶液中の不純物の質量%として表される。不純物が複数種類ある場合には、不純物の総量は各不純物についての不純物含有率の総和として表される。

なお、実施例1～8、及び比較例1～6で用いたグリコール酸水溶液は無機物を実質的に含有しないので、無機物の量

の測定は行わなかったが、実施例 9 で用いたグリコール酸水溶液は無機不純物として塩化ナトリウムを含有しているので、塩化ナトリウムの量を、下記の方法で測定して、塩化ナトリウムの量と上記の有機化合物の量との総和に基づいて不純物含有率を求めた。

グリコール酸結晶の純度（質量%）は次の式で定義される。

$$\text{グリコール酸結晶の純度（質量%）} = 100 - (\text{グリコール酸結晶の不純物含有率})$$

なお、不純物である塩化ナトリウムの含有率は、後述の方法で求める。

(8) グリコール酸結晶中のナトリウムイオン含有率  
50m1 のメスフラスコに、約 5 g のグリコール酸結晶を秤量採取し、蒸留水で溶解した後、更に蒸留水を加えて 50 m1 に希釀し、サンプル水溶液を得る。このサンプル水溶液を、イオンクロマトグラフィーにより、下記の測定条件にて分析する。

<イオンクロマトグラフィー測定条件>

装置：日本国東ソー（株）製 8020 シリーズ

50

カラム：日本国東ソー（株）製 TSKgel I C - C

a t i o n

カラム温度：40℃

溶離液：2 mmol 硝酸水溶液

溶離液流量：0.5 ml/分

検出器：日本国東ソー（株）製 CM-8020 電導度

計

電導度計にて検出されたナトリウムイオンのピークのエリ  
アカウント数を測定する。

別途作成したナトリウムイオンの検量線を用いて、上記の  
ナトリウムイオンのピークエリアのカウント数から、サンプ  
ル水溶液中のナトリウムイオンの質量を算出する。グリコール  
酸結晶中のナトリウムイオン含有率は、グリコール酸結晶  
に対する、サンプル水溶液中のナトリウムイオンの濃度（質  
量%）として表される。

#### (9) グリコール酸結晶中の塩素イオン含有率

50 ml のメスフラスコに、約5 g のグリコール酸結晶を  
秤量採取し、蒸留水を加えて50 ml に希釀し、サンプル水  
溶液を得る。このサンプル水溶液を、イオンクロマトグラフ  
ィーにより、下記の測定条件にて分析する。

## &lt;イオンクロマトグラフィー測定条件&gt;

装置：日本国東ソー（株）製 8020シリーズ

カラム：日本国東ソー（株）製 TSKgel Super  
IC-Anion-PWXL PEEK

カラム温度：40°C

溶離液：日本国東ソー（株）製 TSKeluent IC  
-Anion-A

溶離液流量：0.8 ml/分

検出器：日本国東ソー（株）製 CM-8020 電導度計

電導度計にて検出された塩素イオンのピークのエリアカウント数を測定する。

別途作成した塩素イオンの検量線を用いて、上記の塩素イオンのピークエリアのカウント数から、サンプル水溶液中の塩素イオンの質量を算出する。グリコール酸結晶中の塩素イオン含有率は、グリコール酸結晶に対する、サンプル水溶液中の塩素イオンの濃度（質量%）として表される。

(10) グリコール酸結晶中の塩化ナトリウム含有率  
グリコール酸結晶中の塩化ナトリウム含有率（質量%）は  
次の式によって求める。

グリコール酸結晶中の塩化ナトリウム含有率（質量%）

$$\begin{aligned}
 &= \text{グリコール酸結晶中のナトリウムイオン含有率} \\
 &\quad + \text{グリコール酸結晶中の塩素イオンの含有率}
 \end{aligned}$$

(11) 得られたグリコール酸結晶の収率

得られたグリコール酸結晶の収率は、次の式によって求め  
る。

グリコール酸結晶の収率 (質量 %)

$$= \frac{\text{得られたグリコール酸結晶の質量}}{(\text{グリコール酸水溶液の質量}) \times (\text{換算单量体グリコール酸質量比})} \times 100$$

(12) 重合体の重量平均分子量

ゲルパーミエーションクロマトグラフィー (G P C) 分析  
装置を用い、以下のように求める。

8.0 mM のトリフルオロ酢酸ナトリウムを溶解したヘキサ  
フルオロイソプロパノールを溶離液とし、カラム温度 40 °C、  
溶離液流量 1 ml / 分の条件下でカラム (カラム構成は、日  
本国東ソー (株) 製 Tskgel (登録商標) G5000H  
- HR、及び日本国東ソー社製 Tskgel (登録商標) G  
3000H-HR の各 1 本ずつの直列からなる) を通し、分  
子量 1, 577, 000, 685, 000, 333, 000、  
100, 250, 62, 60.0, 24, 300, 12, 70  
0, 4, 700, 1, 680 の分子量既知の单分散ポリメタ

クリル酸メチル標準物質の R I 検出による溶出時間から求めた検量線を予め作成し、その溶出時間から重量平均分子量を算出する。

(13) 重合体（結晶プレポリマー）の融解ピーク温度  
 J I S K 7 1 2 1 に準じ、米国パーキンエルマー（株）  
 製の D S C - 7 を用い、重合体（結晶プレポリマー）を - 2  
 0 °C から 2 5 0 °C まで 1 0 °C / 分の昇温速度で昇温させて得  
 られる D S C 曲線より求める。得られた結晶プレポリマーの  
 融解ピーク温度に基づいて、結晶プレポリマーを固相重合す  
 る際の重合温度を決定する。

#### 製造例 1 (グリコール酸水溶液 1 の製造)

市販のグリコール酸水溶液（米国デュポン社製、G L Y C  
 O L I C A C I D 7 0 % S O L U T I O N - T E C H  
 N I C A L）の組成を調整することにより、本発明で用いる  
 グリコール酸水溶液（A）の要件を満たすグリコール酸水溶  
 液 1 を得た。

上記の市販のグリコール酸水溶液は、水分含有率が 3 1 質  
 量 %、換算单量体グリコール酸質量比が 0. 6 9 であり、不  
 純物として、ジグリコール酸を 1. 2 質量 %、メトキシ酢酸  
 を 0. 8 質量 %、ギ酸を 0. 4 質量 % 含んでいた。  
 この市販のグリコール酸水溶液を、窒素気流下にて常圧条

件下、110～113℃にて50分間脱水濃縮することにより、水分含有率が18質量%、換算单量体グリコール酸質量比が0.83、单量体グリコール酸含有率が54.5質量%、不純物として、ジグリコール酸を1.5質量%、メトキシ酢酸を0.8質量%、ギ酸を0.3質量%含有するグリコール酸水溶液1を製造した。

#### 製造例2（グリコール酸水溶液2の製造）

製造例1で用いたものと同様の市販のグリコール酸水溶液の組成を調整することにより、本発明で用いるグリコール酸水溶液（A）の要件を満たすグリコール酸水溶液2を得た。具体的には、上記の市販のグリコール酸水溶液を、窒素気流下にて減圧条件下（圧力：16kPa）、75℃にて50分間脱水濃縮することにより、水分含有率が13質量%、換算单量体グリコール酸質量比が0.91、单量体グリコール酸含有率が52質量%、不純物として、ジグリコール酸を1.7質量%、メトキシ酢酸を1.0質量%、ギ酸を0.2質量%含有するグリコール酸水溶液2を製造した。

#### 製造例3（グリコール酸水溶液3の製造）

製造例1で用いたものと同様の市販のグリコール酸水溶液の組成を調整することにより、本発明で用いるグリコール酸水溶液（A）の要件を満たすグリコール酸水溶液3を得た。

具体的には、上記の市販のグリコール酸水溶液を、窒素気流下にて常圧条件下、110～132℃にて150分間脱水濃縮することにより、水分含有率が7質量%、換算单量体グリコール酸質量比が1.0、单量体グリコール酸含有率が41質量%、不純物として、ジグリコール酸を1.9質量%、メトキシ酢酸を1.1質量%、ギ酸を0.3質量%含有するグリコール酸水溶液3を製造した。

#### 製造例4（比較グリコール酸水溶液4の製造）

製造例1で用いたものと同様の市販のグリコール酸水溶液の組成を調整することにより、本発明で用いるグリコール酸水溶液（A）の要件を満たさない比較グリコール酸水溶液4を得た。上記の市販のグリコール酸水溶液を、窒素気流下にて常圧条件下、110～135℃にて160分間脱水濃縮することにより、水分含有率が3質量%、換算单量体グリコール酸質量比が1.05、单量体グリコール酸含有率が35質量%、不純物として、ジグリコール酸を2.0質量%、メトキシ酢酸を1.1質量%、ギ酸を0.2質量%含有する比較グリコール酸水溶液4を製造した。

#### 製造例5（グリコール酸水溶液5の製造）

市販のグリコール酸結晶（日本国東京化成試薬特級品）を用いて、本発明で用いるグリコール酸水溶液（A）の要件を

満たすグリコール酸水溶液5を得た。具体的な製造方法は以下通りである。

攪拌機を備えた2リットルの丸底フラスコに、蒸留水450g、真空条件下、35℃で十分に乾燥したグリコール酸結晶（日本国東京化成試薬特級品）990g、クロロ酢酸（日本国和光純薬試薬特級品）11.6g、塩化ナトリウム（日本国和光純薬試薬容量分析用標準物質グレード）198gを仕込み、空気下、温度27℃にて、攪拌回転数100回転／分で5時間攪拌することにより、水分含有率が28質量%、換算単量体グリコール酸質量比が0.60、不純物としてクロロ酢酸を0.7質量%、塩化ナトリウムを12質量%含有するグリコール酸水溶液を製造した。このグリコール酸水溶液を窒素気流下にて常圧条件下、113～125℃で150分間脱水濃縮を行った後、析出した塩化ナトリウムを、濾紙（日本国安積濾紙株式会社製、商品名3250）を用い、加圧濾過器により0.3MPaの圧力条件下（媒体として窒素を使用）での加圧濾過により除去することにより、水分含有率が14質量%、換算単量体グリコール酸質量比が0.91、単量体グリコール酸含有率が52質量%、不純物として、クロロ酢酸を1.1質量%、塩化ナトリウムを5質量%含有するグリコール酸水溶液5を製造した。

99.99質量%以上の純度を有するグリコール酸結晶及び蒸留水を用いて、温度5℃にて、換算单量体グリコール酸質量比0.65のグリコール酸水溶液（以下、「洗浄液1」と称する）を製造した。

#### 製造例7（洗浄液2の製造）

99.99質量%以上の純度を有するグリコール酸結晶及び蒸留水を用いて、温度5℃にて、換算单量体グリコール酸質量比0.45のグリコール酸水溶液（以下、「洗浄液2」と称する）を製造した。

#### 製造例8（洗浄液3の製造）

99.99質量%以上の純度を有するグリコール酸結晶及び蒸留水を用いて、温度55℃にて、換算单量体グリコール酸質量比1.00のグリコール酸水溶液（以下、「洗浄液3」と称する）を製造した。

#### 実施例1

攪拌器及び温度計を備えた1リットルのフラスコに、グリコール酸水溶液1を500g仕込み、温度0℃に冷却した後、純度99.99%のグリコール酸結晶0.5gを種結晶として加え、温度を0℃にて保持しつつ、100rpmで溶液を攪拌して15分間晶析を行い、析出結晶を含むスラリーを得

た。

得られたスラリーを、漏斗（日本国桐山製作所製の商品名 KIRIYAMA ROHTO SU-95）と濾紙（日本国桐山製作所製の濾紙No. 5B；直径95mm）とを用いて減圧（真空）濾過し、連続的な濾液の排出が終了した後、10分間通気脱水を行って、結晶を回収した。スラリーの減圧（真空）濾過及び結晶の通気脱水の際の分離性は良好であった。

回収結晶を、洗浄液1を100ml用いて、5℃の温度で置換洗浄を行った後、上記と同様の減圧（真空）濾過操作及び通気脱水操作を行って、回収結晶中の母液等の残留物を除去した。この洗浄操作、減圧（真空）濾過操作及び通気脱水操作を合計4回行った。

次いで、一定の質量になるまで、35℃にて真空乾燥を行い、乾燥したグリコール酸結晶を得た。

得られた乾燥グリコール酸結晶の収率は27質量%であった。また、乾燥グリコール酸結晶の純度は99.96質量%であった。

## 実施例2

洗浄液1の代わりに洗浄液2を用いること以外は実施例1と同様の操作を行うことにより、乾燥したグリコール酸結晶を得た。析出結晶を含むスラリーの減圧（真空）濾過及び結

晶の通気脱水の際の分離性は良好であった。

得られた乾燥グリコール酸結晶の収率は20質量%であつた。また、乾燥グリコール酸結晶の純度は99.96質量%であった。

### 実施例3

グリコール酸水溶液1の代わりにグリコール酸水溶液2を用いたこと、及び晶析時間を2時間としたこと以外は実施例1と同様の操作を行うことにより、乾燥したグリコール酸結晶を得た。析出結晶を含むスラリーの減圧（真空）濾過及び結晶の通気脱水の際の分離性は良好であった。

得られた乾燥グリコール酸結晶の収率は28質量%であつた。また、乾燥グリコール酸結晶の純度は99.97質量%であった。

### 実施例4

晶析後、結晶の分離回収を濾紙（日本国安積濾紙株式会社製、商品名3250）を用い、加圧濾過器により0.3MPaの圧力条件下（媒体として空気を使用）にて行い、連続的な濾液の排出が終了した後、10分間通気脱水する操作を行つたこと、回収した結晶を洗浄しなかつたこと以外は実施例3と同様の操作を行うことにより、乾燥したグリコール酸結晶を得た。析出結晶を含むスラリーの減圧（真空）濾過及び

結晶の通気脱水の際の分離性は良好であった。

得られた乾燥グリコール酸結晶の收率は28質量%であった。また、乾燥グリコール酸結晶の純度は99.92質量%であった。

#### 実施例5

グリコール酸水溶液2の代わりにグリコール酸水溶液3を用いたこと、晶析温度及び晶析時間をそれぞれ、10℃、45分としたこと、及び加圧濾過時に媒体として窒素を使用したこと以外は実施例4と同様の操作を行うことにより、乾燥したグリコール酸結晶を得た。析出結晶を含むスラリーの減圧（真空）濾過及び結晶の通気脱水の際の分離性は良好であった。

得られた乾燥グリコール酸結晶の收率は23質量%であった。また、乾燥グリコール酸結晶の純度は99.90質量%であった。

#### 比較例1

攪拌機を備えた2リットルの丸底フラスコに、蒸留水328g、グリコール酸結晶（日本国東京化成試薬特級品）820g、ジグリコール酸結晶（日本国和光純薬試薬特級品）15.3g、メトキシ酢酸（日本国和光純薬試薬）8.2g、90%ギ酸水溶液（日本国和光純薬試薬特級品）を仕込み、

温度40℃にて、攪拌回転数50回転／分で4時間攪拌することにより、水分含有率が31質量%、換算単量体グリコール酸質量比が0.7、単量体グリコール酸が59質量%、不純物として、ジグリコール酸を1.3質量%、メトキシ酢酸を0.7質量%、ギ酸を0.4質量%含有する比較グリコール酸水溶液6を製造した。

グリコール酸水溶液2の代わりに上記製造した比較グリコール酸水溶液6を用いること、晶析温度及び晶析時間をそれぞれ-18℃、1.5時間としたこと以外は実施例4と同様の操作を行うことにより、乾燥したグリコール酸結晶を得た。析出結晶を含むスラリーの減圧（真空）濾過及び結晶の通気脱水の際の分離性は良好であった。

得られた乾燥グリコール酸結晶の収率は20質量%であった。また、乾燥グリコール酸結晶の純度は99.47質量%と低かった。

## 比較例2

グリコール酸水溶液1の代わりに比較例1で製造した比較グリコール酸水溶液6を用いたこと、晶析温度及び晶析時間をそれぞれ-18℃、1.5時間としたこと以外は実施例1と同様の操作を行うことにより、乾燥したグリコール酸結晶を得た。析出結晶を含むスラリーの減圧（真空）濾過及び結晶の通気脱水の際の分離性は良好であった。

得られた乾燥グリコール酸結晶の収率は20質量%であつた。また、乾燥グリコール酸結晶の純度は99.55質量%と低かった。

### 比較例3

グリコール酸水溶液1の代わりに比較グリコール酸水溶液4を用いたこと、及び晶析温度及び晶析時間をそれぞれ10℃、1時間としたこと以外は実施例4と同様の操作を行うことにより、乾燥したグリコール酸結晶を得た。析出結晶を含むスラリーは非常に高粘度であり、析出結晶を含むスラリーの加濾過及び結晶の通気脱水の際の分離性は不良であった。

得られた乾燥グリコール酸結晶の収率は20質量%であつた。また、乾燥グリコール酸結晶の純度は99.68質量%と低かった。

### 比較例4

比較例1で製造した比較グリコール酸水溶液6を、減圧条件下（圧力：4～5kPa）、45℃にて20分間脱水濃縮することにより、水分含有率が19質量%、換算单量体グリコール酸質量比が0.84、单量体グリコール酸含有率が65質量%、不純物として、ジグリコール酸を1.6質量%、メトキシ酢酸を0.8質量%、ギ酸を0.3質量%含有する比較グリコール酸水溶液7を製造した。

グリコール酸水溶液3の代わりに比較グリコール酸水溶液7を用いたこと以外は実施例5と同様の操作を行うことにより、乾燥したグリコール酸結晶を得た。析出結晶を含むスラリーの減圧（真空）濾過及び結晶の通気脱水の際の分離性は良好であった。

得られた乾燥グリコール酸結晶の収率は23質量%であった。また、乾燥グリコール酸結晶の純度は99.69質量%と低かった。

#### 比較例5

比較例1で製造した比較グリコール酸水溶液6（1230g）に、純度99.98質量%のグリコール酸結晶（不純物として、ジグリコール酸を0.01質量%、メトキシ酢酸を0.01質量%含む）を41g添加した後、窒素気流下にて常圧条件下、水分含有率が27質量%となるまで脱水濃縮し、次いで、減圧条件下（圧力：4～5kPa）、45℃にて10分間、引き続き脱水濃縮を行うことにより、水分含有率が23質量%、換算単量体グリコール酸質量比が0.75、単量体グリコール酸含有率が55質量%、不純物としてジグリコール酸を1.4質量%、メトキシ酢酸を0.8質量%、ギ酸を0.3質量%含有する比較グリコール酸水溶液8を製造した。

グリコール酸水溶液3の代わりに比較グリコール酸水溶液

8を用いたこと、及び晶析温度を-5℃としたこと以外は実施例5と同様の操作を行うことにより、乾燥したグリコール酸結晶を得た。析出結晶を含むスラリーの減圧（真空）濾過及び結晶の通気脱水の際の分離性は良好であった。

得られた乾燥グリコール酸結晶の収率は14質量%であった。また、乾燥グリコール酸結晶の純度は99.72質量%と低かった。

#### 比較例6

比較グリコール酸水溶液4（1000g）を30℃とした後、30℃の水を30g添加し、3分間緩やかに攪拌して均一の状態とすることによって、水分含有率が6質量%、換算单量体グリコール酸質量比が1.02、单量体グリコール酸含有率が34質量%、不純物として、ジグリコール酸を1.9質量%、メトキシ酢酸を1.1質量%、ギ酸を0.2質量%含有する比較グリコール酸水溶液9を製造した。

グリコール酸水溶液3の代わりに比較グリコール酸水溶液9を用いたこと以外は実施例5と同様の操作を行うことにより、乾燥したグリコール酸結晶を得た。析出結晶を含むスラリーの減圧（真空）濾過及び結晶の通気脱水の際の分離性は不良であった。

得られた乾燥グリコール酸結晶の収率は22質量%であった。また、乾燥グリコール酸結晶の純度は99.70質量%

と低かった。

### 実施例 6

グリコール酸水溶液 1 の代わりにグリコール酸水溶液 2 を 420 g 用いたこと、及び晶析温度を 10 ℃ としたこと以外は実施例 1 と同様にして晶析を行うことにより、スラリーを得た。得られたスラリーの濾過を、濾紙として日本国安積濾紙株式会社製の濾紙（商品名 3250）を用い、加圧濾過器により 0.3 MPa の圧力条件下（媒体として空気を使用）にて行い、連続的な濾液の排出が終了した後、10 分間通気脱水する操作を行って、析出結晶を分離した（以後、分離されたこの結晶を「結晶 1」と称する）。また、排出した濾液は回収した。

回収した濾液の一部（262 g）に対して、新たに、上記した市販のグリコール酸水溶液 211 g を加え、これを窒素気流下にて常圧条件下、111～120 ℃ にて 35 分間脱水濃縮することにより、水分含有率が 14 質量%、換算单量体グリコール酸質量比が 0.90、单量体グリコール酸含有率が 51 質量%、不純物として、ジグリコール酸を 2.0 質量%、メトキシ酢酸を 1.2 質量%、ギ酸を 0.2 質量% 含有する 420 g のグリコール酸水溶液 10（本発明で用いるグリコール酸水溶液（A））を製造した。

グリコール酸水溶液 10 を用いたこと以外は上述の結晶 1

の製造と同様の晶析、濾過、通気脱水を行うことにより、析出結晶を分離した（以後、分離されたこの結晶を「結晶2」と称する）。

結晶1からの残留物の除去を次のように行った。結晶1を300m1のナスフラスコに移し、洗浄液1を100m1添加後、5℃にて30分間攪拌した。次いで、上述した方法と同様の操作で結晶の分離回収を加圧濾過器により、0.3M Paの圧力条件下（媒体として空気を使用）にて行い、連続的な濾液の排出が終了した後、10分間通気脱水する操作を行って、析出結晶を分離した。

上記の残留物の除去操作（即ち、洗浄、加圧濾過及び通気脱水）を更に1回行い、結晶を回収した。

回収した結晶を、一定の質量になるまで、35℃にて真空乾燥を行い、乾燥した結晶を得た。

結晶1に対して行ったのと同様の残留物の除去操作（即ち、洗浄、加圧濾過及び通気脱水を2回行うこと）と乾燥操作とを結晶2についても実施し、乾燥した結晶を得た。

いずれの場合においても、析出結晶を含むスラリーの加圧濾過及び結晶の通気脱水の際の分離性は良好であった。結晶1から得られたグリコール酸結晶の場合も、結晶2から得られた乾燥グリコール酸結晶の場合も、収率は22質量%であった。また、結晶1から得られた乾燥グリコール酸結晶の場合も、結晶2から得られた乾燥グリコール酸結晶の場合も、

純度は 99.97 質量% であった。したがって、母液をリサイクル使用しても収率及び純度の低下を招くことがなかった。

### 実施例 7

洗浄を、洗浄液 3 を用い、温度 55°C にて 20 分間攪拌して行ったこと以外は実施例 6 と同様の操作を行い、2 種類の乾燥グリコール酸結晶を得た。

いずれの場合においても、析出結晶を含むスラリーの加圧濾過及び結晶の通気脱水の際の分離性は良好であった。

2 種類の乾燥グリコール酸結晶は、ともに収率が 22 質量%、ともに純度が 99.99 質量% であった。したがって、母液をリサイクル使用しても収率及び純度の低下を招くことがなかった。

### 実施例 8

グリコール酸水溶液 2 を 600 g 用いたこと、及び晶析温度を 10°C としたこと以外は実施例 1 と同様にして結晶析出操作を行い、スラリーを得た。得られたスラリーの濾過を、濾紙として日本国安積濾紙株式会社製の濾紙（商品名 3250）を用い、加圧濾過器により 0.3 MPa の圧力条件下（媒体として空気を使用）にてを行い、連続的な濾液の排出が終了した後、10 分間通気脱水する操作を行って、析出結晶を分離した（以後、分離されたこの結晶を「結晶 3」と称す

る）。また、排出した濾液は回収した。

回収した濾液を、窒素気流下にて常圧条件下、112～125℃にて40分間脱水濃縮することにより、水分量が13質量%、換算グリコール酸質量比が0.91、単量体グリコール酸が51質量%、不純物として、ジグリコール酸を2.2質量%、メトキシ酢酸を1.3質量%、ギ酸を0.2質量%含有するグリコール酸水溶液11（本発明で用いるグリコール酸水溶液（A））を製造した。

グリコール酸水溶液11を用いたこと以外は上述した結晶3の製造と同様の晶析、濾過、通気脱水を行うことにより、析出結晶を分離した（以後、分離されたこの結晶を「結晶4」と称する）。

結晶3からの残留物の除去を次のように行った。結晶3を300m1のナスフラスコに移し、洗浄液1を100m1添加後、5℃にて30分間攪拌した。次いで、上述した方法と同様の操作で結晶の分離回収を加圧濾過器により、0.3MPaの圧力条件下（媒体として空気を使用）行い、連続的な濾液の排出が終了した後、10分間通気脱水する操作を行つて、析出結晶を分離した。

上記の残留物の除去操作（即ち、洗浄、加圧濾過及び通気脱水）を更に1回行い、結晶を回収した。

回収した結晶を、一定の質量になるまで、35℃にて真空乾燥を行い、乾燥した結晶を得た。

結晶 3 に対して行ったのと同様の残留物の除去操作（即ち、洗浄、加圧濾過及び通気脱水を 2 回行うこと）と乾燥操作とを、結晶 4 についても実施した。

いずれの場合においても、析出結晶を含むスラリーの加圧濾過及び結晶の通気脱水の際の分離性は良好であった。

結晶 3 から得られた乾燥グリコール酸結晶の場合も、結晶 4 から得られた乾燥グリコール酸結晶の場合も、収率は 22 質量 % であった。また、結晶 3 から得られた乾燥グリコール酸結晶の場合も、結晶 4 から得られた乾燥グリコール酸結晶の場合も、純度は 99.97 質量 % であった。したがって、母液をリサイクル使用しても収率及び純度の低下を招くことがなかった。

### 実施例 9

グリコール酸水溶液 1 の代わりにグリコール酸水溶液 5 を用いたこと、及び晶析温度を 10 °C としたこと以外は実施例 1 と同様の操作を行うことにより、乾燥したグリコール酸結晶を得た。析出結晶を含むスラリーの減圧（真空）濾過及び結晶の通気脱水の際の分離性は良好であった。

得られた乾燥グリコール酸結晶の収率は 23 質量 % であった。また、乾燥グリコール酸結晶の純度は 99.97 質量 % であった。なお、乾燥グリコール酸結晶は塩化ナトリウムなどを不純物として含んでいたが、不純物含有量は 0.03 質

量%（塩化ナトリウム含有量は50 ppm以下）であり、これ以上のイオン交換樹脂処理などの精製を必要としないほどであった。

### 実施例10

上記の実施例で得られた乾燥グリコール酸結晶を用いて、グリコール酸-乳酸共重合体の製造を以下のように行った。

#### （樹脂製造例1）

留出管及び攪拌翼を備えた100mlのパイレックスガラス製セパラブルフラスコに、実施例1で得たグリコール酸結晶76g、オランダ国PURAC社製90%L-乳酸水溶液10.0g、更に、これらの合計量に対して0.07質量%のテトライソプロポキシゲルマニウムを仕込み、窒素置換を行った後に、130℃から150℃まで80分かけて昇温し、150℃にて40分間保持して脱水を行った。この後、温度を150℃とし、 $1.013 \times 10^5 \text{ Pa}$ から $1.333 \times 10^2 \text{ Pa}$ まで3時間かけて減圧し、引き続き、減圧度 $1.333 \times 10^2 \text{ Pa}$ で1時間反応させて縮合水の除去を続けた。その後、更に、200℃に昇温し、減圧度 $1.333 \times 10^2 \text{ Pa}$ で7時間反応を継続した。反応終了後、圧力を $1.333 \times 10^2 \text{ Pa}$ に保持したまま温度130℃で2時間加熱処理することにより、重量平均分子量が3.3万で、160℃と181℃とに融解ピークを有するグリコール酸-乳酸

共重合体の結晶を得た（以下、この結晶を「結晶プレポリマー」と称する）。

得られた結晶プレポリマーを、乳鉢で粉碎した後に篩にかけることにより、粒子直径が100～300μmの範囲にある粒状プレポリマーを得た。

得られた粒状プレポリマー0.5gをパイレックスガラス製U字管に充填し、圧力 $1.013 \times 10^5$ Pa、温度170℃にて、露点温度-85℃の窒素ガスを0.8Nリットル/分の流量で流しながら、30時間固相重合を行うことにより、グリコール酸-乳酸共重合体樹脂を得た。

得られた共重合体樹脂の重量平均分子量を測定した。結果を表1に示す。

#### （樹脂製造例2）

実施例2で得た乾燥グリコール酸結晶を用いたこと以外は樹脂製造例1と同様の方法で、グリコール酸-乳酸共重合体樹脂を得た。得られた共重合体樹脂の重量平均分子量を測定した。結果を表1に示す。

#### （樹脂製造例3）

実施例3で得た乾燥グリコール酸結晶を用いたこと以外は樹脂製造例1と同様の方法で、グリコール酸-乳酸共重合体樹脂を得た。得られた共重合体樹脂の重量平均分子量を測定した。結果を表1に示す。

#### （樹脂製造例4）

実施例 4 で得た乾燥グリコール酸結晶を用いたこと以外は樹脂製造例 1 と同様の方法で、グリコール酸－乳酸共重合体樹脂を得た。得られた共重合体樹脂の重量平均分子量を測定した。結果を表 1 に示す。

(樹脂製造例 5)

実施例 5 で得た乾燥グリコール酸結晶を用いたこと以外は樹脂製造例 1 と同様の方法で、グリコール酸－乳酸共重合体樹脂を得た。得られた共重合体樹脂の重量平均分子量を測定した。結果を表 1 に示す。

(樹脂製造例 6)

比較例 1 で得られたグリコール酸結晶を用いたこと、及び固相重合時間を 30 時間としたこと以外は樹脂製造例 1 と同様の方法で、グリコール酸－乳酸共重合体樹脂を得た。更に、固相重合時間を 50 時間としたこと以外は上記と同様の方法で、グリコール酸－乳酸共重合体樹脂を得た。得られた共重合体樹脂の重量平均分子量を測定した。結果を表 1 に示す。

(樹脂製造例 7)

比較例 2 で得られたグリコール酸結晶を用いたこと、及び固相重合時間を 30 時間としたこと以外は樹脂製造例 1 と同様の方法で、グリコール酸－乳酸共重合体樹脂を得た。更に、固相重合時間を 50 時間としたこと以外は上記と同様の方法で、グリコール酸－乳酸共重合体樹脂を得た。得られた共重合体樹脂の重量平均分子量を測定した。結果を表 1 に示す。

## (樹脂製造例 8)

比較例 3 で得られたグリコール酸結晶を用いたこと、及び固相重合時間を 30 時間としたこと以外は樹脂製造例 1 と同様の方法で、グリコール酸-乳酸共重合体樹脂を得た。更に、固相重合時間を 50 時間としたこと以外は上記と同様の方法で、グリコール酸-乳酸共重合体樹脂を得た。得られた共重合体樹脂の重量平均分子量を測定した。結果を表 1 に示す。

## (樹脂製造例 9)

比較例 4 で得られたグリコール酸結晶を用いたこと、及び固相重合時間を 30 時間としたこと以外は樹脂製造例 1 と同様の方法で、グリコール酸-乳酸共重合体樹脂を得た。更に、固相重合時間を 50 時間としたこと以外は上記と同様の方法で、グリコール酸-乳酸共重合体樹脂を得た。得られた共重合体樹脂の重量平均分子量を測定した。結果を表 1 に示す。

## (樹脂製造例 10)

比較例 5 で得られたグリコール酸結晶を用いたこと、及び固相重合時間を 30 時間としたこと以外は樹脂製造例 1 と同様の方法で、グリコール酸-乳酸共重合体樹脂を得た。更に、固相重合時間を 50 時間としたこと以外は上記と同様の方法で、グリコール酸-乳酸共重合体樹脂を得た。得られた共重合体樹脂の重量平均分子量を測定した。結果を表 1 に示す。

## (樹脂製造例 11)

比較例 6 で得られたグリコール酸結晶を用いたこと、及び

固相重合時間を30時間としたこと以外は樹脂製造例1と同様の方法で、グリコール酸-乳酸共重合体樹脂を得た。更に、固相重合時間を50時間としたこと以外は上記と同様の方法で、グリコール酸-乳酸共重合体樹脂を得た。得られた共重合体樹脂の重量平均分子量を測定した。結果を表1に示す。

(樹脂製造例12)

実施例6で得られたグリコール酸結晶を用いたこと以外は樹脂製造例1と同様の方法で、グリコール酸-乳酸共重合体樹脂を得た。得られた共重合体樹脂の重量平均分子量を測定した。結果を表1に示す。

(樹脂製造例13)

実施例7で得られたグリコール酸結晶を用いたこと以外は樹脂製造例1と同様の方法で、グリコール酸-乳酸共重合体樹脂を得た。得られた共重合体樹脂の重量平均分子量を測定した。結果を表1に示す。

(樹脂製造例14)

実施例8で得られたグリコール酸結晶を用いたこと以外は樹脂製造例1と同様の方法で、グリコール酸-乳酸共重合体樹脂を得た。得られた共重合体樹脂の重量平均分子量を測定した。結果を表1に示す。

(樹脂製造例15)

実施例9で得られたグリコール酸結晶を用いたこと以外は樹脂製造例1と同様の方法で、グリコール酸-乳酸共重合体

樹脂を得た。得られた共重合体樹脂の重量平均分子量を測定した。結果を表1に示す。

表 1

例	用いた乾燥グリコール酸結晶の純度 (質量%)	固相重合時間 (h r)	得られたグリコール酸-乳酸共重合体樹脂の重量 平均分子量
樹脂製造例 1	9 9 . 9 6	3 0	1 8 . 0 万
樹脂製造例 2	9 9 . 9 6	3 0	1 8 . 5 万
樹脂製造例 3	9 9 . 9 7	3 0	1 8 . 6 万
樹脂製造例 4	9 9 . 9 2	3 0	1 6 . 0 万
樹脂製造例 5	9 9 . 9 0	3 0	1 5 . 2 万
樹脂製造例 6	9 9 . 4 7	3 0	5 . 0 万
		5 0	4 . 9 万
樹脂製造例 7	9 9 . 5 5	3 0	5 . 5 万
		5 0	5 . 3 万
樹脂製造例 8	9 9 . 6 8	3 0	8 . 0 万
		5 0	8 . 1 万
樹脂製造例 9	9 9 . 6 9	3 0	8 . 1 万
		5 0	8 . 2 万
樹脂製造例 10	9 9 . 7 2	3 0	8 . 8 万
		5 0	8 . 8 万
樹脂製造例 11	9 9 . 7 0	3 0	8 . 4 万
		5 0	8 . 5 万
樹脂製造例 12	9 9 . 9 7	3 0	1 8 . 5 万
樹脂製造例 13	9 9 . 9 9	3 0	2 1 . 0 万
樹脂製造例 14	9 9 . 9 7	3 0	1 8 . 3 万
樹脂製造例 15	9 9 . 9 7	3 0	1 8 . 4 万

### 産業上の利用可能性

本発明の方法により、高分子量のグリコール酸重合体の製造などに有利に用いられる高純度のグリコール酸結晶を、簡便に且つ高収率で工業的規模で製造することが可能になる。

## 請 求 の 範 囲

1. グリコール酸水溶液から高純度のグリコール酸結晶を製造する方法であって、次の工程：

(1) 単量体グリコール酸及びグリコール酸縮合物を含有し且つ次の特性 (a)、(b) 及び (c) を有するグリコール酸水溶液 (A) を提供する工程：

(a) 水分含有率は 5 ~ 20 質量 % である、

(b) 該単量体グリコール酸の質量と、成分単量体グリコール酸の質量に換算した該グリコール酸縮合物の質量との合計の、該グリコール酸水溶液 (A) の質量に対する比として定義される換算単量体グリコール酸質量比は 0.60 ~ 1.00 である、及び

(c) 単量体グリコール酸含有率は 20 ~ 57 質量 % である、

(2) 該グリコール酸水溶液 (A) からグリコール酸結晶を析出させる工程、及び

(3) 析出したグリコール酸結晶を該グリコール酸水溶液 (A) から分離する工程

を包含することを特徴とする方法。

2. 工程 (2) における該グリコール酸水溶液 (A) からのグリコール酸結晶の析出を、-30 ~ 50 °C の範囲の温度で

行うことを特徴とする、請求項 1 に記載の方法。

3. 工程 (2) における該グリコール酸水溶液 (A) からのグリコール酸結晶の析出を、種結晶としてのグリコール酸結晶の存在下で行うことを特徴とする、請求項 1 または 2 に記載の方法。

4. 工程 (3) の後にさらに次の工程：

(4) 分離したグリコール酸結晶をグリコール酸水溶液 (B) で洗浄する工程を包含することを特徴とする、請求項 1 ~ 3 のいずれかに記載の方法。

5. 該グリコール酸水溶液 (B) が単量体グリコール酸、及び場合によってはグリコール酸縮合物を含有し、且つ次の式 (I) 及び (II) を満足することを特徴とする、請求項 4 に記載の方法。

$$0.0055 \times T + 0.3 \leq W \leq 0.0072 \times T + 0.8 \quad (I)$$

$$-5 \leq T \leq 70 \quad (II)$$

(式中、

W は、該単量体グリコール酸の質量と、成分単量体グリコール酸の質量に換算した該グリコール酸縮合物の質量との合

80

計の、該グリコール酸水溶液（B）の質量に対する比として定義される換算単量体グリコール酸質量比を表し、  
Tは該グリコール酸水溶液（B）の温度（℃）を表す。）

## INTERNATIONAL SEARCH REPORT

International application No.  
PCT/JP03/00858A. CLASSIFICATION OF SUBJECT MATTER  
Int.Cl<sup>7</sup> C07C51/43, 59/06

According to International Patent Classification (IPC) or to both national classification and IPC

## B. FIELDS SEARCHED

Minimum documentation searched (classification system followed by classification symbols)  
Int.Cl<sup>7</sup> C07C51/43, 59/06

Documentation searched other than minimum documentation to the extent that such documents are included in the fields searched

Electronic data base consulted during the international search (name of data base and, where practicable, search terms used)  
WPI (DIALOG)

## C. DOCUMENTS CONSIDERED TO BE RELEVANT

Category*	Citation of document, with indication, where appropriate, of the relevant passages	Relevant to claim No.
Y	WO 92/5138 A1 (E.I. DU PONT DE NEMOURS AND CO.), 02 April, 1992 (02.04.92), Claims; examples & EP 552255 A1 & JP 6-501268 A	1-5
Y	JP 9-2998 A (Mitsui Toatsu Chemicals, Inc.), 07 January, 1997 (07.01.97), Par. No. [0023] (Family: none)	1-5
Y	JP 62-77349 A (Denki Kagaku Kogyo Kabushiki Kaisha), 09 April, 1987 (09.04.87), Claims; examples (Family: none)	1-5

 Further documents are listed in the continuation of Box C. See patent family annex.

- \* Special categories of cited documents:
- "A" document defining the general state of the art which is not considered to be of particular relevance
- "E" earlier document but published on or after the international filing date
- "L" document which may throw doubts on priority claim(s) or which is cited to establish the publication date of another citation or other special reason (as specified)
- "O" document referring to an oral disclosure, use, exhibition or other means
- "P" document published prior to the international filing date but later than the priority date claimed

- "T" later document published after the international filing date or priority date and not in conflict with the application but cited to understand the principle or theory underlying the invention
- "X" document of particular relevance; the claimed invention cannot be considered novel or cannot be considered to involve an inventive step when the document is taken alone
- "Y" document of particular relevance; the claimed invention cannot be considered to involve an inventive step when the document is combined with one or more other such documents, such combination being obvious to a person skilled in the art
- "&" document member of the same patent family

Date of the actual completion of the international search  
21 April, 2003 (21.04.03)Date of mailing of the international search report  
20 May, 2003 (20.05.03)Name and mailing address of the ISA/  
Japanese Patent Office

Authorized officer

Facsimile No.

Telephone No.

## INTERNATIONAL SEARCH REPORT

International application No.  
PCT/JP03/00858

## C (Continuation). DOCUMENTS CONSIDERED TO BE RELEVANT

Category*	Citation of document, with indication, where appropriate, of the relevant passages	Relevant to claim No.
A	JP 5-92102 A (Idemitsu Petrochemical Co., Ltd.), 16 April, 1993 (16.04.93), Claims (Family: none)	1-5
A	JP 8-268955 A (Hoechst AG.), 15 October, 1996 (15.10.96), Claims; Par. No. [0003] & EP 733616 A1	1-5

## A. 発明の属する分野の分類 (国際特許分類 (IPC))

Int. C17 C07C51/43, 59/06

## B. 調査を行った分野

調査を行った最小限資料 (国際特許分類 (IPC))

Int. C17 C07C51/43, 59/06

最小限資料以外の資料で調査を行った分野に含まれるもの

国際調査で使用した電子データベース (データベースの名称、調査に使用した用語)

WPI (DIALOG)

## C. 関連すると認められる文献

引用文献の カテゴリー*	引用文献名 及び一部の箇所が関連するときは、その関連する箇所の表示	関連する 請求の範囲の番号
Y	WO 92/5138 A1 (E. I. DU PONT DE NEMOURS AND COMPANY) 1992.04.02, CLAIMS, EXAMPLES & EP 552255 A1 & JP 6-501268 A	1-5
Y	JP 9-2998 A (三井東圧化学株式会社) 1997.01.07, [0023] (ファミリーなし)	1-5
Y	JP 62-77349 A (電気化学工業株式会社) 1987.04.09, 特許請求の範囲, 実施例 (ファミリーなし)	1-5

 C欄の続きにも文献が列挙されている。 パテントファミリーに関する別紙を参照。

## \* 引用文献のカテゴリー

「A」特に関連のある文献ではなく、一般的技術水準を示す  
もの

「E」国際出願日前の出願または特許であるが、国際出願日  
以後に公表されたもの

「L」優先権主張に疑義を提起する文献又は他の文献の発行  
日若しくは他の特別な理由を確立するために引用する  
文献 (理由を付す)

「O」口頭による開示、使用、展示等に言及する文献

「P」国際出願日前で、かつ優先権の主張の基礎となる出願

の日の後に公表された文献

「T」国際出願日又は優先日後に公表された文献であって  
出願と矛盾するものではなく、発明の原理又は理論  
の理解のために引用するもの

「X」特に関連のある文献であって、当該文献のみで発明  
の新規性又は進歩性がないと考えられるもの

「Y」特に関連のある文献であって、当該文献と他の1以  
上の文献との、当業者にとって自明である組合せに  
よって進歩性がないと考えられるもの

「&」同一パテントファミリー文献

国際調査を完了した日

21. 04. 03

国際調査報告の発送日

20.05.03

国際調査機関の名称及びあて先

日本国特許庁 (ISA/JP)

郵便番号 100-8915

東京都千代田区霞が関三丁目4番3号

特許庁審査官 (権限のある職員)

松本 直子



4 H 9546

電話番号 03-3581-1101 内線 3443

C (続き) . 関連すると認められる文献		
引用文献の カテゴリー*	引用文献名 及び一部の箇所が関連するときは、その関連する箇所の表示	関連する 請求の範囲の番号
A	JP 5-92102 A(出光石油化学株式会社)1993.04.16, 特許請求の範囲 (ファミリーなし)	1 - 5
A	JP 8-268955 A(ヘキスト・アクチングゼルシャフト)1996.10.15 特許請求の範囲, [0003] & EP 733616 A1	1 - 5